平安京左京四条三坊十五町
烏丸御池遺跡

２０１３年

古代文化調査会

平安京左京四条三坊十五町
烏丸御池遺跡

２０１３年

古代文化調査会

例　言

1．本書は、古代文化調査会が京都市中京区六角通烏丸東入堂之前町において、大和ハウス工業株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、大和ハウス工業株式会社より委託を受けた古代文化調査会の家崎孝治が担当した。

3．調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。

4．本書の編集・執筆は家崎がおこなった。

5．図面及び遺物整理は、板谷桃代、水谷明子、山田学が分担し、製図は水谷が担当した。

6．本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。

7．本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の１の地図（三条大橋）、国土地理院発行の25,000分の１の地図（京都西南部）を調整し、使用した。

8．土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

9．遺構番号は実測図・写真ともに共通している。

10．発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太　宇野隆志　馬瀬智光　奥井智子　梶川敏夫　北田栄造　鈴木久史　西村寅造
西森正晃　長谷川行孝　堀　大輔　宮原健吾　吉田公茂　李　永一
（株）明輝建設　（株）大高建設　（有）京都編集工房　（財）京都市埋蔵文化財研究所
（株）東洋設計事務所　大和ハウス工業（株）

本 文 目 次

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　遺　　構……7

Ⅲ　遺　　物……13

Ⅳ　ま　と　め……24

図 版 目 次

図版1　遺跡　1　南半部第1面全景（南から）
　　2　南半部第2面全景（南から）
図版2　遺跡　1　南半部第3面全景（南から）
　　2　北半北部第1面全景（東から）
図版3　遺跡　1　北半南部第1面全景（北から）
　　2　北半北部第2面全景（東から）
図版4　遺跡　1　北半南部第2面全景（北東から）
　　2　北半南部第3面全景（北東から）
図版5　遺跡　1　井戸20（西から）
　　2　井戸67（東から）
図版6　遺跡　1　井戸216（北から）
　　2　溝210土器出土状況（北から）
図版7　遺物　整地層225・土壙132・溝210・井戸216出土遺物
図版8　遺物　土壙112・井戸67・土壙82・池160・土壙162出土遺物
図版9　遺物　土壙162出土遺物
図版10　遺物　井戸67出土遺物
図版11　遺物　井戸67・土壙110・柱穴62出土遺物
図版12　遺物　柱穴70・池160・土壙177・整地層・土壙199・81・196・162出土遺物
図版13　遺物　土壙200・井戸67・土壙162・溝210・土壙139・76・池160・井戸216出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査地点位置図……1
図２　調査地位置図……2
図３　平安京条坊と調査地位置図……2
図４　四行八門と調査位置関係図……2
図５　西壁断面実測図……4
図６　北部西壁断面実測図……5
図７　南壁断面実測図……5
図８　第１～３面遺構実測図……6
図９　建物１実測図……9
図10　建物２実測図……9
図11　建物３実測図……9
図12　Y-21,867.50ライン溝210・整地層225断面実測図……9
図13　土壙180実測図……9
図14　土壙82実測図……9
図15　井戸216実測図……10
図16　井戸67実測図……11
図17　井戸20実測図……11
図18　溝210土器出土状況実測図……11
図19　整地層225出土遺物実測図……14
図20　土壙132出土遺物実測図……14
図21　溝210出土遺物実測図……15
図22　井戸216出土遺物実測図……15
図23　土壙112出土遺物実測図……17
図24　井戸67出土遺物実測図……17
図25　土壙82出土遺物実測図……18
図26　池160出土遺物実測図……18
図27　土壙162出土遺物実測図……18
図28　井戸67出土軒瓦拓影・実測図……20
図29　軒瓦拓影・実測図……20
図30　石製品実測図……22
図31　銭貨拓影図……23

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

Ⅰ　調査の経過

調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区六角通烏丸東入堂之前町240である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京跡の左京四条三坊十五町跡及び烏丸御池遺跡に当たる。2012年６月、当地に大和ハウス工業株式会社によるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下２mにおいて平安時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうことになった。調査は2012年８月末より開始することとなった。

調査経過

当該地は、平安京左京四条三坊十五町に相当し、西が烏丸小路、東が東洞院大路、北が六角小路、南が四条坊門小路に囲まれたところで、調査対象地は十五町の北半部の西三行北二～四門に相当する。文献資料からは、平安時代後期に藤原国明の六角東洞院第が存在したところで、この

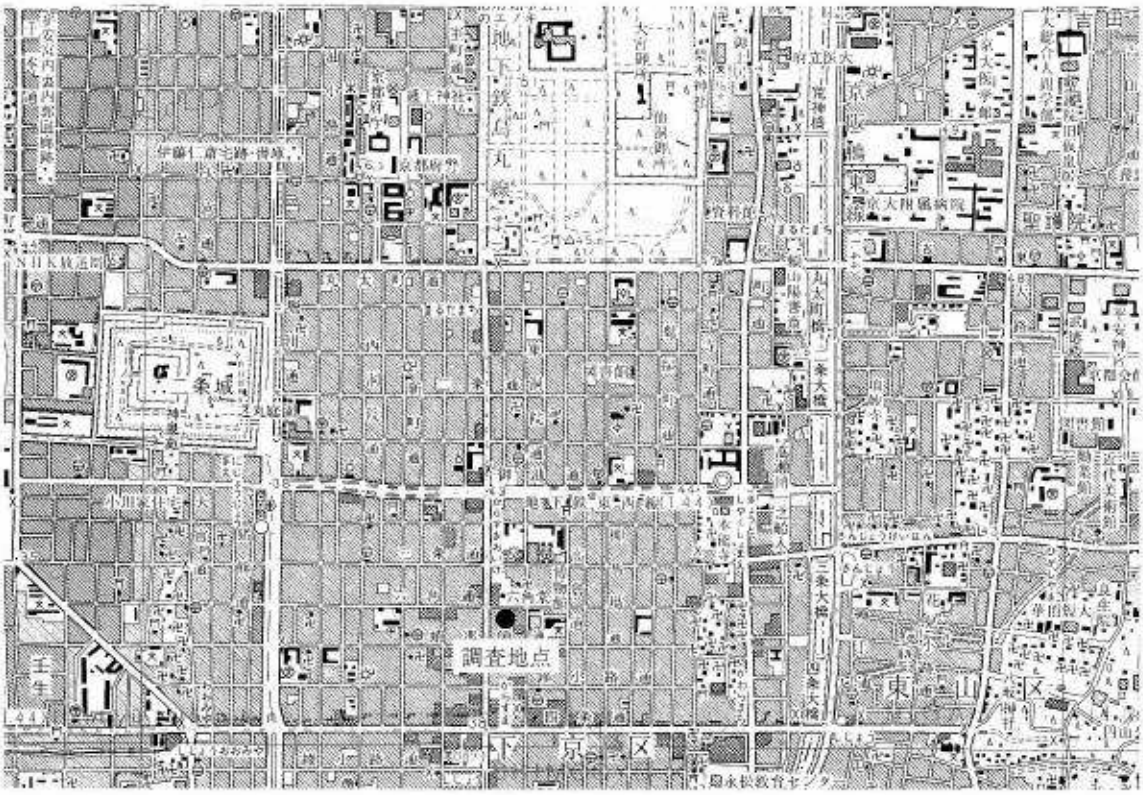


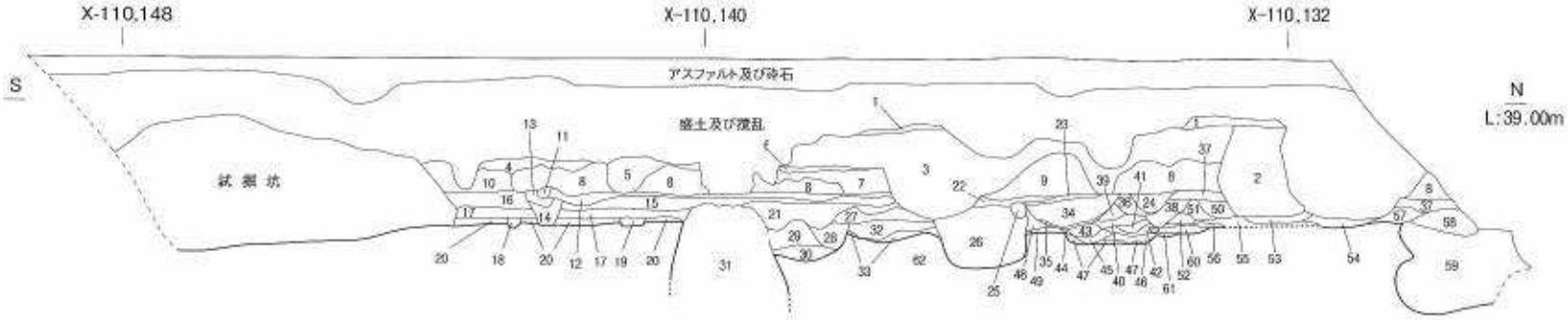
図１　調査地点位置図（1/25,000）

邸宅は承徳元年（1097）に白河法皇の御所となり、その後、中納言藤原公能から藤原兼実（九条家の祖）へと受け継がれたとされている[註1]。また、北接する十六町には有名な六角堂がある。この寺は正式名を紫雲山頂法寺と称する天台宗の寺院で、従来聖徳太子の創建と言われてきたが、近年の発掘調査などの成果により、この寺は10世紀の終わり頃に創建されたことが明らかとなっている[註2]。

調査においては、江戸時代の土層が地表下1.9mと深く、江戸時代の土層を機械力によって除去した。敷地内では土砂置き場が限られたため、調査対象地を北半部と南半部に２分割して反転方式で調査をおこなうこととした。実際の調査は、南半部より調査に着手し、平安時代から室町時代にわたる３面の調査をおこなったのち、北半部の調査をおこなった。北半部の調査で出た土は南半部の調査済み部分に土砂を置いた。2012年８月30日から調査を開始し、南半部は９月27日に終了したのち北半部の調査に着手した。北半部は10月19日に終了した。調査面積は238㎡、実働日数は36日間であった。

調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系Ⅵによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点（X=-110,124m、Y=-21,863.4m）とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、４mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十五町における築地四隅の座標値（新測地系）は次のとおりである。

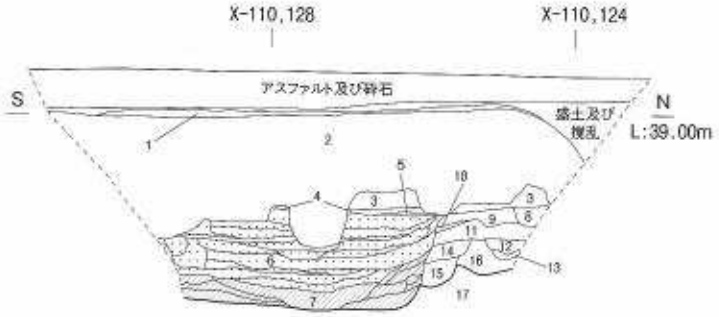
北西	X= -110,103.57m	北東	X= -110,103.08m
	Y= -21,943.63m		Y= -21,824.25m
南西	X= -110,222.96m	南東	X= -110,222.47m
	Y= -22,943.15m		Y= -22,823.76m



1 7.5YR5/6明褐色焼土（漆喰混）
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥（漆喰・φ2cm礫混）
3 2.5Y3/2黒褐色砂泥（漆喰・炭・焼土混）（近世層）
4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（炭焼土混）
5 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂
6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土多量混）
7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫
9 2.5Y3/2黒褐色砂泥（炭・焼土混）
10 2.5Y3/2黒褐色砂泥
11 2.5Y3/2黒褐色砂泥
12 2.5Y3/2黒褐色砂泥（やや粘質）
13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
14 2.5Y3/2黒褐色砂泥（炭・焼土混）（溝39）
15 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
16 2.5Y3/2黒褐色砂泥（φ1-5cm礫混）
17 2.5Y3/2黒褐色砂泥
18 2.5Y3/2黒褐色砂泥（柱穴56）
19 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥（柱穴152）
20 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（整地層③）
21 2.5Y3/2黒褐色砂泥
22 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(炭・焼土混)
23 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥（炭・焼土混）
24 2.5Y3/1黒褐色砂泥（炭・焼土混）
25 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
26 10YR3/2黒褐色砂泥（漆喰・炭混）（土壙11）
27 10YR3/2黒褐色砂泥
28 10YR3/2黒褐色砂泥（炭混）　土壙118
29 2.5Y3/2黒褐色砂泥（炭混）
30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
31 10YR3/2黒褐色砂泥（井戸67掘形）
32 10YR2/2黒褐色砂泥（炭・土師器多量混）　土壙132
33 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
34 2.5Y3/2暗オリーブ褐色砂泥
35 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
36 10YR3/2黒褐色砂泥（炭混）
37 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
38 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
39 2.5Y3/2黒褐色砂泥
40 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
41 2.5Y3/2黒褐色砂泥　土壙194
42 2.5Y5/4黄褐色砂泥（堅く締まる）
43 2.5Y3/2黒褐色砂泥（炭・土師器多量混）
44 2.5Y3/2黒褐色砂泥
45 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥　溝210
46 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
47 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
48 2.5Y3/2黒褐色砂泥
49 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（堅く締まる）（整地層225）
50 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
51 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
52 2.5Y3/2黒褐色砂泥（土師器多量混）
53 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
54 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（炭混）
56 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（やや粘質）
57 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（小礫混）
58 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥（φ3-20cm礫多量混）
59 2.5Y3/2黒褐色砂泥（土壙162）
60 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥（φ1-4cm礫少量混）（整地層225）
61 2.5Y3/2黒褐色砂泥（整地層225）
62 10YR3/2黒褐色砂泥（ベース）

0　5m

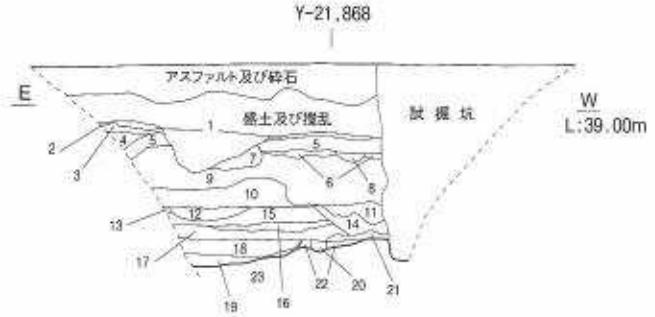
図5　西壁断面実測図（1/100）



1 10YR3/4暗褐色砂泥（炭・焼土多量混）
2 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（礫少混）（近世層）
3 10YR3/3暗褐色粗砂（礫混）
4 10YR3/4暗褐色砂泥
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
6 池160上層　砂泥と砂の互層
7 池160下層　2.5Y3/2黒褐色腐植土（植物遺体含）
8 10YR3/2黒褐色砂泥（炭・焼土少量混）
9 10YR3/3暗褐色砂泥（炭・焼土少量混）
10 10YR3/2黒褐色砂泥＋10YR5/4にぶい黄褐色ブロック多量混
11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（炭・焼土少量混）
12 10YR4/2灰黄褐色砂泥（炭微量混）
13 10YR4/2灰黄褐色砂泥（炭・焼土少量混）　溝163
14 10YR4/2灰黄褐色砂泥（炭・焼土微量混）
15 10YR4/2灰黄褐色砂泥（炭・焼土中量混）　土壙177
16 10YR3/2黒褐色砂泥（炭・焼土少量混）　土壙199
17 10YR4/4褐色砂泥（ベース）

0　5m

図6　北部西壁断面実測図（1/100）



1 7.5YR4/4褐色焼土（炭混）
2 10YR3/2黒褐色砂泥（焼土多量）
3 10YR3/3暗褐色砂泥（炭混）
4 10YR4/2灰黄褐色砂泥（粘質土含む）
5 10YR3/2黒褐色砂泥（φ1-10cm礫混）
6 10YR3/4暗褐色砂泥
7 10YR3/3暗褐色砂泥（φ1~4cm礫少量混）
8 10YR3/3暗褐色砂泥（炭・焼土混）
9 10YR3/2黒褐色砂泥（近世層）
10 10YR4/3にぶい黄褐色礫砂（φ1~4cm礫少量混）
11 10YR3/3暗褐色泥砂（φ1-3cm礫微量混）
12 10YR3/2黒褐色砂泥（炭混）
13 10YR3/3暗褐色砂泥
14 10YR3/3暗褐色砂泥（φ1-2cm礫中量混）
15 10YR3/3暗褐色砂泥（炭混）
16 10YR3/3暗褐色砂泥
17 10YR3/2黒褐色砂泥
18 10YR2/3黒褐色砂泥（炭微量混）　土壙76
19 10YR3/2黒褐色砂泥
20 10YR3/2黒褐色砂泥（炭微量混）　柱穴107
21 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト　整地層③
22 10YR3/2黒褐色砂泥（溝143）
23 10YR3/2黒褐色砂泥（ベース）

0　5m

図7　南壁断面実測図（1/100）

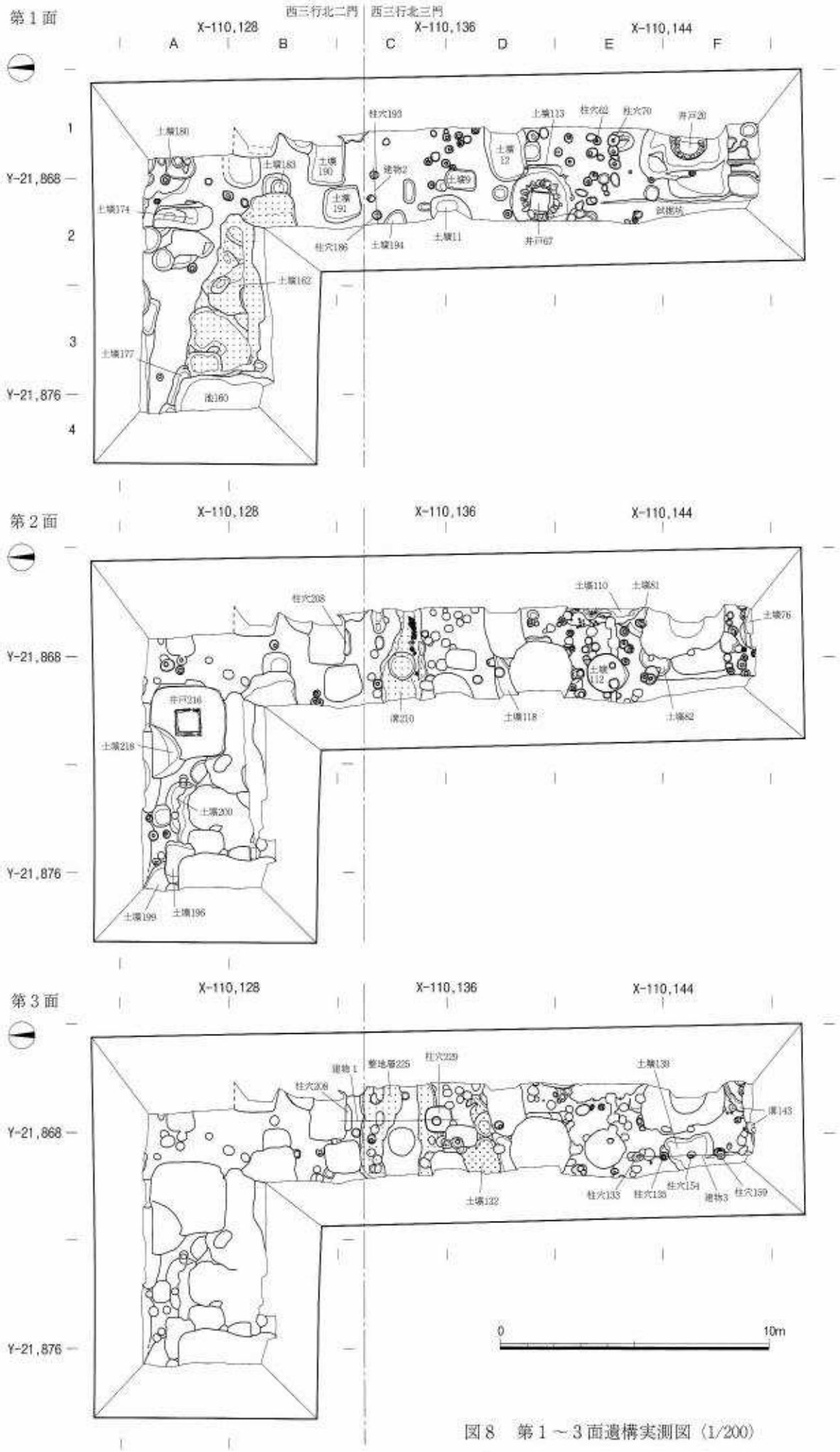


図8　第1～3面遺構実測図（1/200）

Ⅱ 遺　　構

調査地は敷地全体にアスファルトと砕石及び盛土が厚さ0.2～0.5m程あり、その下は江戸時代の土層が地表下1.9mまで堆積する。盛土直下には焼土層が広がり、この焼土層は蛤御門の変（1864年）に伴う焼土層である。また江戸時代の土層の最下層には部分的に砂礫層（西壁第８層、北部西壁第３層、南壁第10層）が厚さ0.3～0.5m程堆積する。この砂礫層は左京域において広範囲に認められるもので、1670年の鴨川の氾濫に伴う洪水堆積層と考えられる。江戸時代の土層下は中世の包含層はほとんど認められず、平安時代後期の整地層が調査区の南半部に良好に残存する。平安時代後期から室町時代の遺構はその整地層上面において検出した。

遺構には古墳時代から江戸時代のものがあり、遺構の種類としては、古墳時代の小溝跡、平安時代の土壙、掘立柱、溝跡、鎌倉時代から室町時代の井戸、土壙、掘立柱跡、江戸時代の井戸、土壙、池、土取跡などがある。遺構総数は234基であった。以下主要な遺構について述べる。

古墳時代

溝143（図７・８・図版２の１）

調査区南端部に位置する。平安時代後期の整地層を除去したのち、黒褐色砂泥層のベース上面において検出した。幅0.2m前後、深さ0.1mの小溝である。東北東から西南西方向に蛇行する。溝内より土師器甕の細片が出土している。古墳時代後期のものとみられる。

平安時代

建物１（図８・９・図版４の２）

調査区中央部に位置する。南北１間分検出した。柱穴229は平安時代後期の整地層225を除去した下層で検出した。柱穴229は一辺１ｍの方形で、深さ0.25m、柱径は0.35mを測る。柱穴208との柱間3.6m（１丈２尺）を測り、柱の太さからも大規模な建物を想定することができる。出土遺物は土師器皿細片で図化するまでに至らなかった。平安時代前期から中期の建物とみられる。なお、土壙180及び土壙113は建物１の延長線上に位置するが、土壙180は出土遺物が土師器細片で時期が不明、土壙113は室町時代の遺物を含む。

整地層225（図５・８・12・図版４の２）

調査区中央部に位置する。溝210の両肩部に幅３ｍ、厚さ0.05～0.15mで堅く整地する。整地層は上下２層に分層でき、間層として一部炭化物を多く含む土層が認められた。この整地層は溝210の構築に伴うものと考えられ、整地層225として遺構番号を付与した。11世紀代のⅣ期の遺物を包含する。

土壙132（図５・８・図版２の１）

調査区中央部、整地層225の東側に位置する。幅0.5～2.0m、東西長３ｍ以上、深さ0.1～

0.3mを測り、不定形な掘形をもつ。掘形内は多量の土器類を包含し、土器溜り状を呈する。11世紀後半。

溝210（図５・８・12・18・図版４の１・６の２）

調査区中央部に位置する。東西方向の溝状遺構である。幅１～1.8m、深さ0.22mを測る。堆積土は大きく上下２層に分層できる。掘形内に大量の土器を包含し、完形品の土師器皿を多く含む。堆積土の下層は顕著な腐食土層などは認められなかったが、掘形の形状より遺水の一部と考えられる。Ⅴ期の遺物に少量のⅣ期の遺物を含む。11世紀から12世紀。

建物２（図８・10・図版３の１）

溝210の北に位置する。径0.35m程の円形の掘形をもち、深さ0.2mで底に根石を据える。東西方向の２基の柱間1.5m（５尺）を測る。平安時代後期。

鎌倉時代から室町時代

井戸216（図８・15・図版３の２・６の１）

調査区北部に位置する。方形縦板組井戸である。木枠の側板は痕跡のみ認められ、最下段の横桟木のみが残存していた。一辺0.9mの方形で、幅0.3mの縦板を３枚で一辺を形成する。縦板の残存高１m程を測る。井戸底は検出面から2.35mの深さで曲物などの施設は認められなかった。井戸底の標高は34.65mを測る。掘形は一辺2.7～2.8mの隅丸方形を呈する。井筒の大きさの割に掘形が異常に大きい。検出面から0.7m掘り下げた段階で木枠の痕跡を認めた。木枠内の埋土は４層ほどに分層でき、上層は黄灰色砂泥層（礫混）、中層は泥土混じりの黒褐色砂礫層、下層は暗オリーブ褐色砂泥層、最下層は泥土混じりのオリーブ褐色砂礫層である。鎌倉時代。

土壙112（図８・図版１の２）

調査区南部に位置する。径1.5m、深さ0.4mを測る。掘形は平面形は円形を呈し、直に落ち込み、底部は平坦である。当初井戸と判断したが、性格不明である。

井戸67（図５・８・16・図版１の２・５の２）

調査区南部の土壙112の北側に位置する。石組井戸である。石組は川原石を積み重ね残存高1.3mを測る。井戸底に方形の木枠を据える。木枠は一辺0.7m、深さ0.24mを測る。掘形は2.3mの円形を呈する。検出面より井戸底の深さ2.4mを測り、井戸底の標高34.8mを測る。なお、石組の川原石の材質は砂岩、チャート、泥岩ホルンフェルスなどで、鴨川水系で産出される岩石群である。室町時代。

土壙82（図８・14・図版１の２）

調査区南部に位置する。土壙112の南側に位置する。土壙は南北長1.2m、東西長0.7m以上、深さ0.01mを測る。掘形内に土師器皿の完形品が上に２枚、下に１枚合わせた状態で出土した。埋納遺構とみられる。Ⅹ期新の16世紀後半。

建物３（図８・11・図版２の１）

調査区南部に位置する。南北３間分検出した。径0.3m前後の掘形をもち、いずれも底部に根

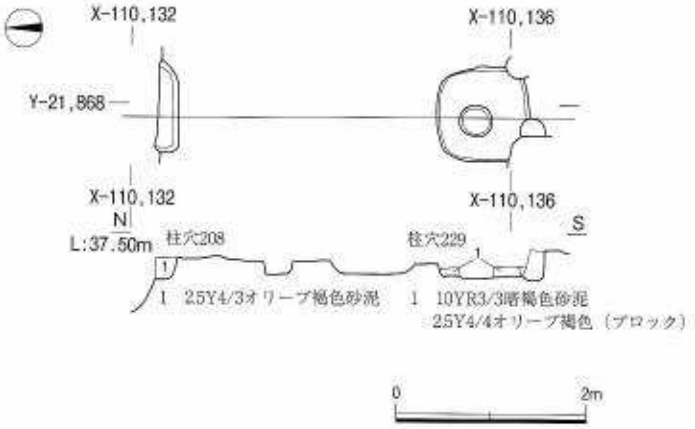


図9　建物1実測図（1/80）

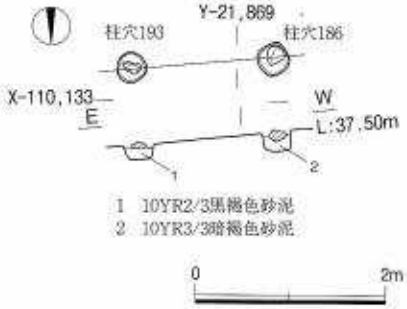


図10　建物2実測図（1/80）

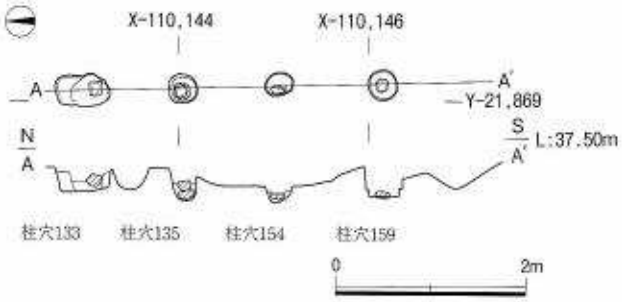


図11　建物3実測図（1/80）

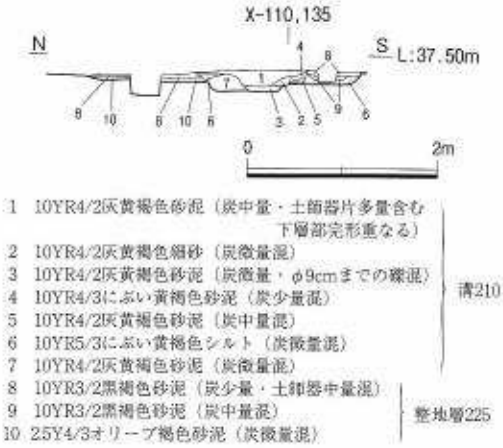


図12　Y-21,867.50ライン溝210・整地層225断面実測図（1/80）

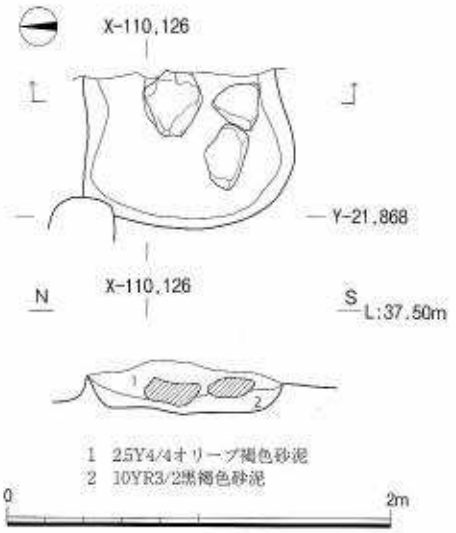


図13　土壙180実測図（1/40）

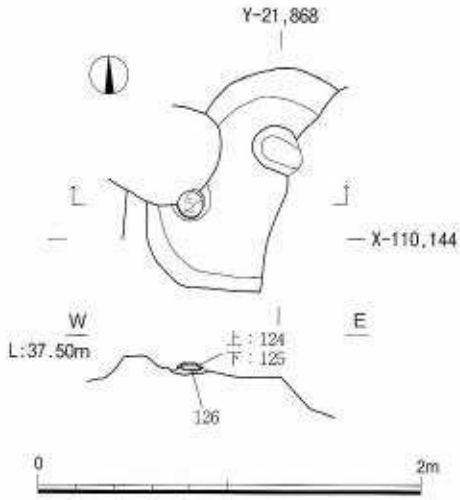
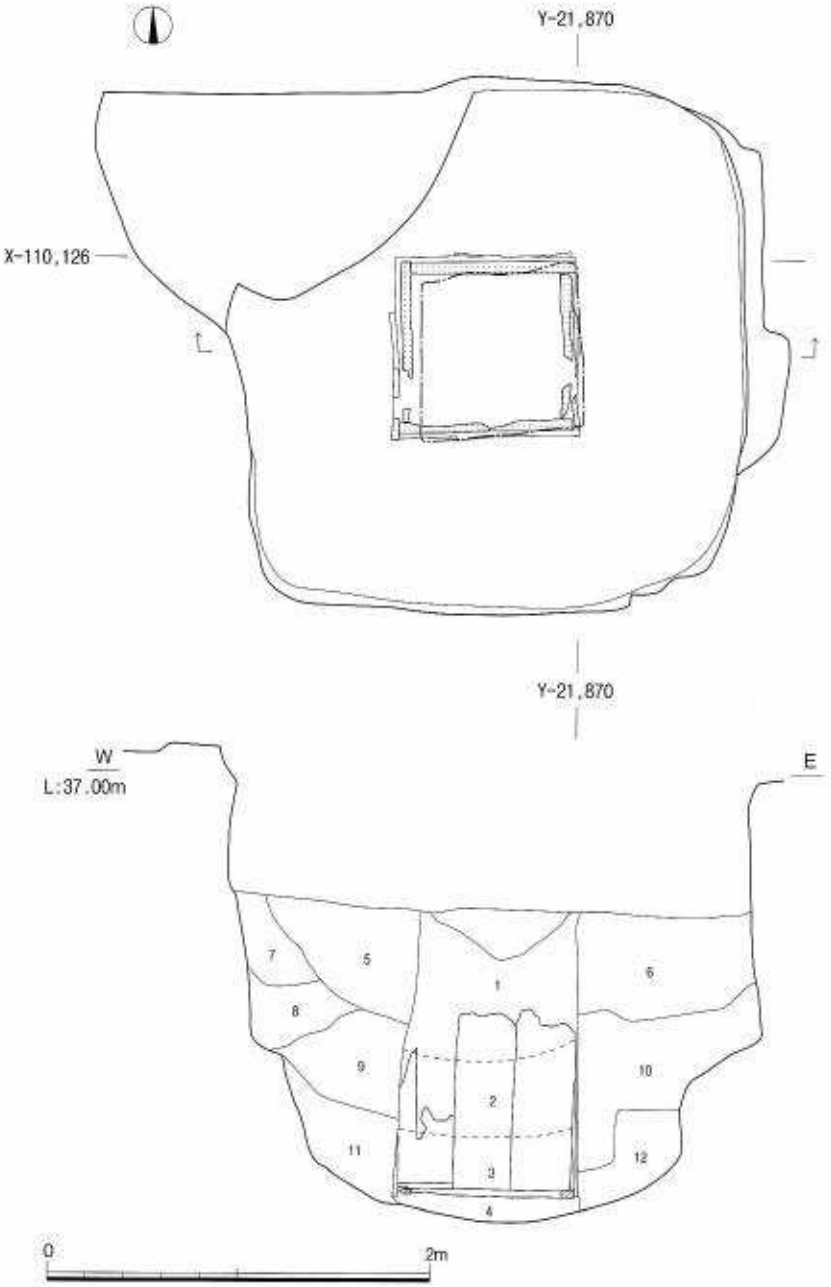


図14　土壙82実測図（1/40）



1 2.5Y4/1黄灰色砂泥・10YR4/6褐色砂泥（ブロック）（φ2～10cm礫混）
2 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
4 2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫（泥土混）
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥（φ2～8cm礫混）
6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥・10YR4/6褐色砂泥（ブロック）（φ3～14cm礫混）
7 5BG4/1暗青灰色砂泥（φ3～12cm礫混）
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥・5BG4/1暗青灰色砂泥（φ2～15cm礫混）
9 10YR4/1褐灰色砂泥・10YR4/6褐色砂泥（φ2～8cm礫混）
10 10YR2/1黒色砂泥・10YR4/6褐色砂泥（ブロック）（φ2～12cm礫混）
11 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥（φ4－14cm礫多量混）
12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥・2.5Y4/4オリーブ褐色（ブロック）（φ2～8cm多量礫混）

図15　井戸216実測図（1/40）

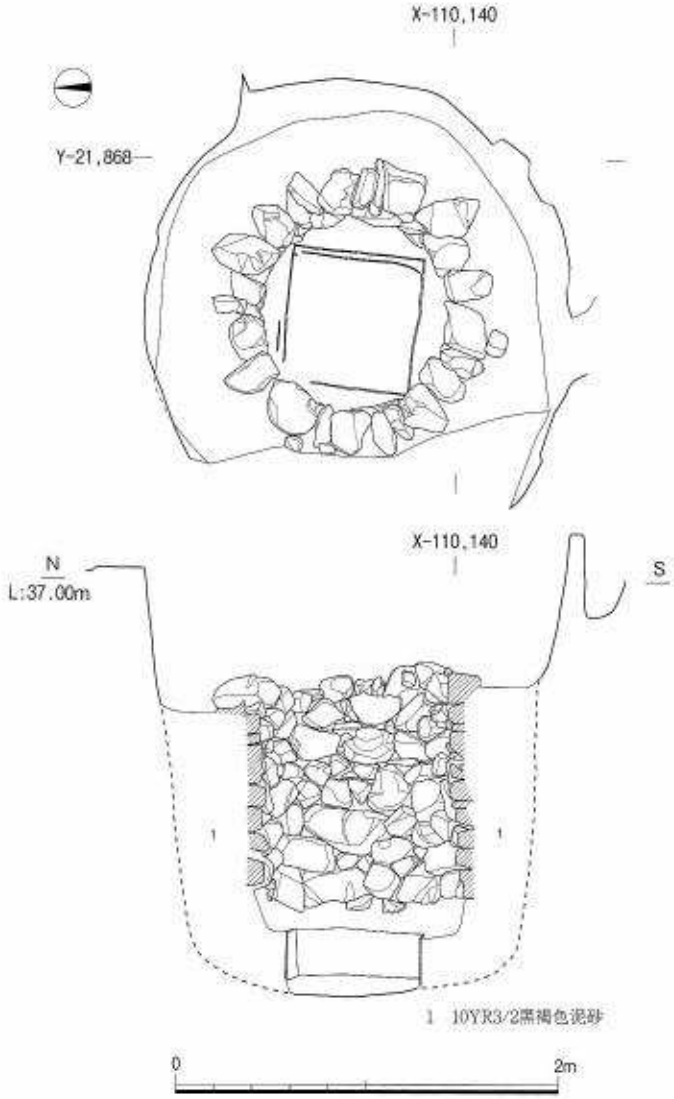


図16　井戸67実測図（1/40）

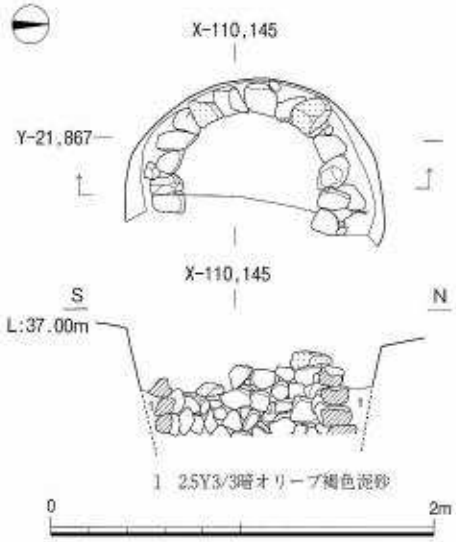


図17　井戸20実測図（1/40）

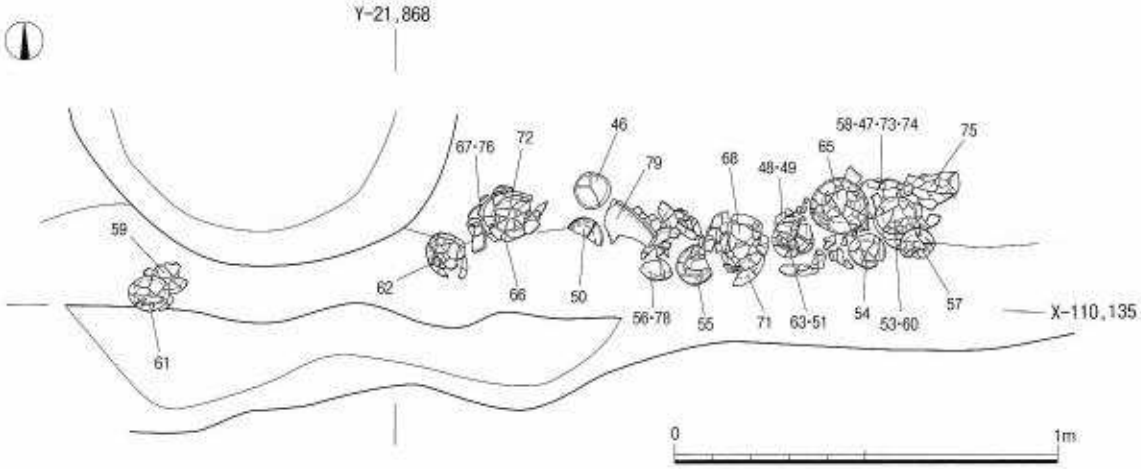


図18　溝210土器出土状況実測図（1/20）

石を据える。柱間１ｍの等間隔である。塀跡の可能性がある。室町時代後期。

江戸時代

池160（図６・８・図版２の２）

調査区北部の西端に位置する。トレンチ外の西及び南に広がる池跡である。南北長４ｍ以上、東西長1.5m以上、深さ1.2mを測る。堆積土10層以上に分層できるが、大きくは砂泥と砂の互層である上層と腐植土層の下層に分かれる。腐植土層は植物遺体を多く含み、箸などの木製品を包含する。江戸時代前期。

井戸20（図８・17・図版１の１・５の１）

調査区南部の東壁沿いに位置する。石組井戸である。掘形は東壁外に広がり、ほぼ全形の半分を確認した。径1.35mの円形の掘形をもち、石組の内径0.7mを測る。花崗岩、花閃緑岩、砂岩、泥岩ホルンフェルス、チャートなどの一部切石を含む川原石で構成している。いずれも鴨川水系で産出される岩石群である。調査区の壁面にかかり、深さ0.6m程のみ確認した。江戸時代前期である。

土壙162（図５・８・図版２の２）

調査区北部に位置する。東西長6.8m、南北長2.5m以上、深さ0.9m程を測る。掘形は袋状を呈し、下層の砂礫層上面で平坦な底面であることから土取穴と見られる。染付、京焼など江戸中期の遺物を含む。

土壙12・190・191（図８・図版１の１・３の１）

調査区の中央部に位置する。いずれも方形の掘形を持ち、染付けや土師器皿などを多量に含む。江戸時代のゴミ捨て穴と考えられる。

Ⅲ 遺　　物

出土した遺物は整理箱に49箱ある。時代は古墳時代後期から江戸時代のものがあり、平安時代後期の土器類が大半を占める。遺物の種類には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年[注2]をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

整地層225出土土器（図19・図版７）

土師器（１～９）、須恵器（13）、黒色土器（10）、灰釉陶器（11、12）などがある。土師器にはⅢA（１～４）、ⅢN（５～９）がある。ⅢAは屈曲する口縁部をもち、端部は肥厚する。ⅢNは口縁部を二段にナデ、口縁端部は外反する。11世紀代の特徴を有する。13は須恵器の甕体部を二次加工している。端部は磨って円形を呈し、片面はきわめて平滑、片面には甕内面の青海波の痕跡が認められる。黒色土器杯（10）は内外面炭素が付着し、Bタイプである。内面は丁寧な磨き、外面は雑に磨きを施す。灰釉陶器椀（11、12）はいずれも底部外面はナデ調整、体部内面を施釉する。12の体部下半はヘラ削り調整をおこなう。

土壙132出土土器（図20・図版７）

土師器（14～39）、灰釉陶器（40）、白磁（41）などがある。土師器ⅢにはⅢ A（14～19）、ⅢAc（20～22）、ⅢN（23～38）及び糸切り土師器Ⅲ（39）がある。ⅢNには口径13～16cm台と口径10～11cm台の大小がある。39はロクロ成形による底部外面糸切り痕の残る白色土器系の土師器Ⅲである。混入品の可能性がある。40は灰釉陶器椀、底部外面糸切り痕認められる。体部内外面を施釉する。白磁碗（41）は外面の体部下半以下高台部は無釉である。高台は削り出しの輪高台で、内側に段差をもつ。これらの一群は11世紀後半Ⅳ期新の特徴を有する。

溝210（図21・図版７・13）

土師器（42～78）、瓦器（79）、灰釉陶器（80）、青磁（81、82）、白磁（83）がある。土師器ⅢにはⅢ A（42～44）、ⅢAc（45～47）、ⅢN（48～78）がある。ⅢNには口径8～10cm台と口径12～16cm台の大小がある。ⅢA及び土師器ⅢN（77、78）が11世紀後半、その他が12世紀代のもので全体として一世紀余りの時間差が認められる。79は瓦器の火舎。口径44cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、内面は平滑（磨き？）に仕上げる。体部外面下半は削り調整をおこなう。胎土は長石粒を多く含み耐火土である。灰釉陶器椀（80）は体部内外面を施釉、高台底部は糸切り痕を丁寧にナデ消す。青磁碗（81）は蛇の目高台を有する。釉は内外面全体に施し、畳付部のみ釉を掻き取る。釉は薄いオリーブ色を呈し、越州窯系青磁である。青磁碗（82）は削り出しの輪高台を有する。内面底部を一段削り下げ、段差をもつ。内面に黄味を帯びたオリーブ色の釉を施す。白

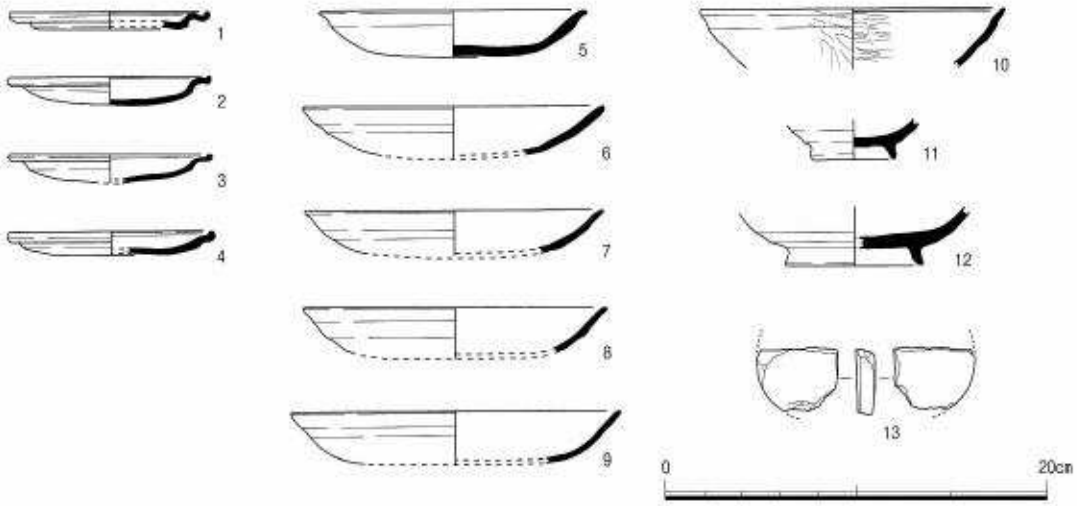


図19　整地層225出土遺物実測図（1/4）

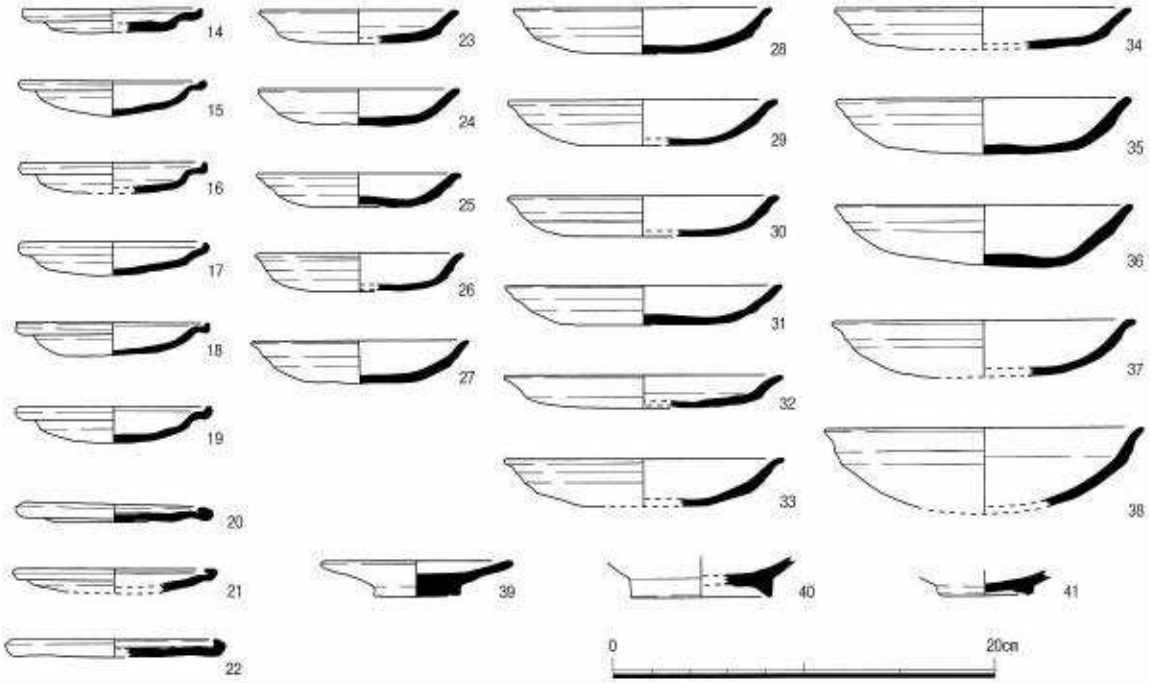


図20　土壙132出土遺物実測図（1/4）

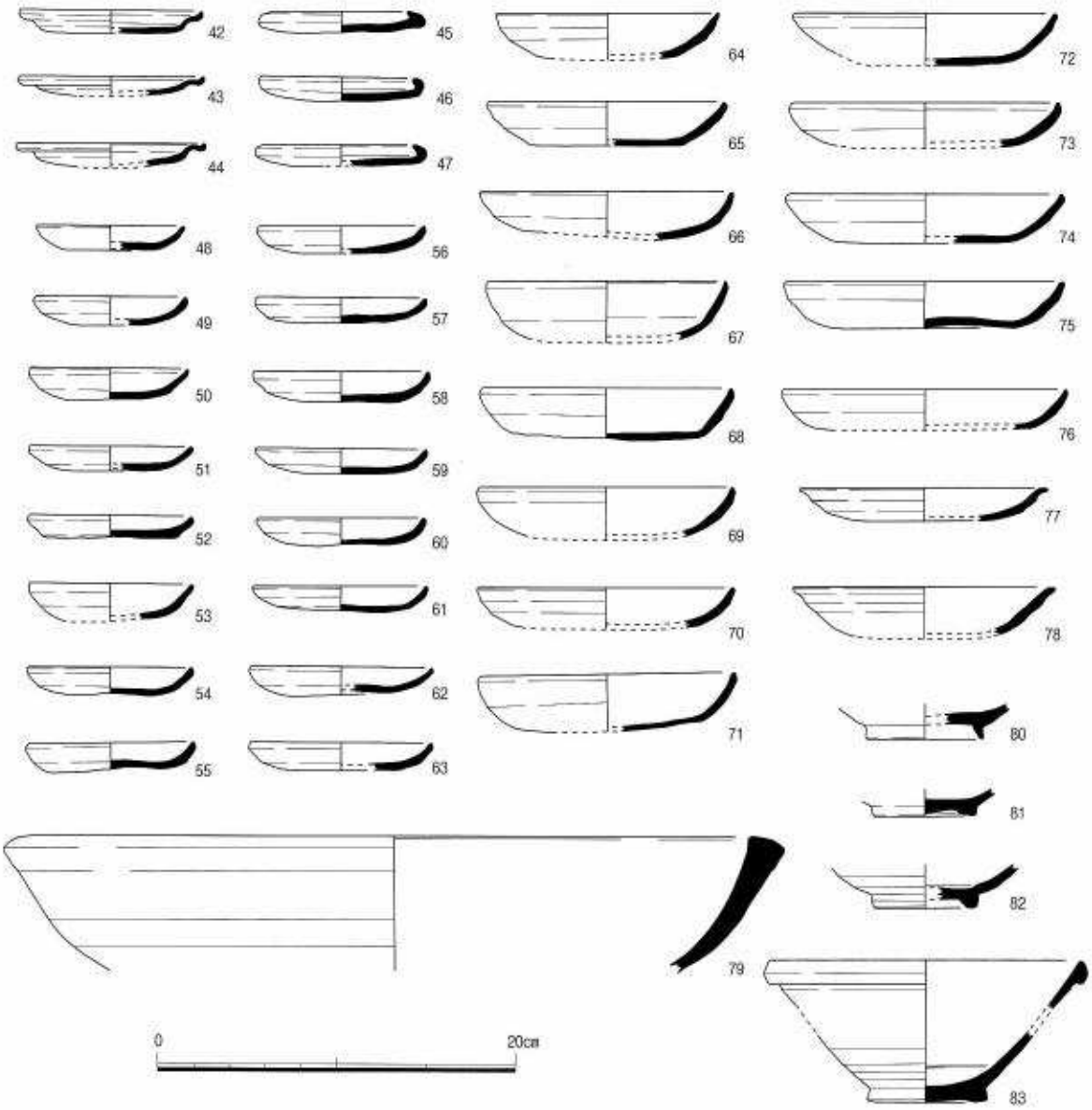


図21　溝210出土遺物実測図（1/4）

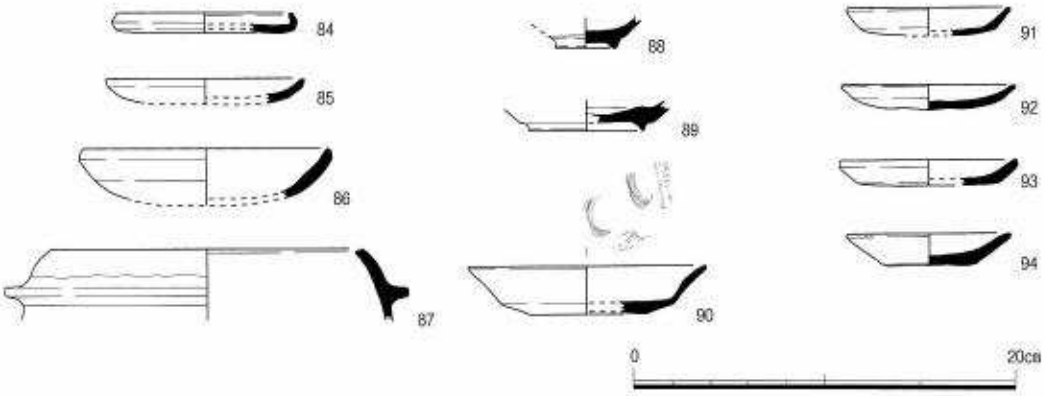


図22　井戸216出土遺物実測図（1/4）

磁碗（83）は大きめの玉縁を有する。内面の体部と底部の境に一条の沈線を施す。高台は削り出す。外面体部下半以下は無釉である。釉はやや青みを帯びた白色を呈する。

井戸216出土土器（図22・図版７・13）

土師器（84～86、91～93）、須恵器（88、89）、瓦器（87）、灰釉陶器（94）、青磁（90）などがある。その内84～90は木枠内出土、91～94は掘形より出土した。土師器には皿Ac、皿Nの大小がある。88は須恵器瓶子の底部。89は山茶碗、底部外面糸切り痕残る。瓦器羽釜（87）は内彎する口縁部をもつ。胎土は長石粒を含む耐火土。94は灰釉陶器の小皿、底部糸切り痕残る。内面に釉がわずかに残る。青磁皿（90）は内面底部に劃花文を施す。底部外面は釉薬を掻き取る。墨書の痕跡が認められる。釉は薄い水色を呈する。13世紀前半。

土壙112出土土器（図23・図版８）

土師器（95～102）、瓦器（104）、白磁（103）がある。土師器には皿Sh（95、96）、皿S（97～99）、皿N（100～102）がある。100は完存品。102の口縁部に煤が付着する。瓦器鍋（104）は体部外面に指押さえ痕残る。体部内面は丁寧にヨコナデ調整をおこなう。底部外面は削り調整を施す。胎土は長石粒を多く含む耐火土。白磁（103）は合子の蓋である。天井部外面に草花文を型押しする。天井部外面のみ象牙色の釉を施す。14世紀前半。

井戸67出土土器（図24・図版８・10・11・13）

土師器（105～114、116、117）、瓦器（115、123）、陶器（118、122）、青磁（119～121）などがある。その内105～110、113～115、118～123は石組上面埋土、111・112は石組内、116・117は掘形出土である。土師器皿には皿Sb、皿Sがある。114は土師器のミニチュアの羽釜である。115・123は瓦器の火舎、115は３足の脚をもつ。123は内彎する口縁部をもち、端部を面取する。口縁部上面は平坦に作り、体部外面全体をきわめて平滑に仕上げる。内面はヨコ方向のナデ調整を施す。118は瀬戸系の卸し皿、底部外面糸切り痕顕著に残る。外面に釉垂れが認められる。122は備前焼の擂鉢である。十条の櫛目を施す。青磁壺（119）は口縁部を外側に折り曲げる。釉はオリーブ色を呈す。120は青磁碗、内面底部に花文（？）を施す。高台は削り出し、釉は底部外面を除く全面に施釉する。121は青白磁である。内面に劃花文を施す。高台は削り出しで断面三角形に作る。高台内面を除く全面に施釉する。15世紀後半から16世紀前半。

土壙82出土土器（図25・図版８）

土師器皿S（124～126）がある。126を除き完形品である。いずれも口径13.2cm、器高2.0cmを測る。内面底部にヨコナデによる浅い圏線が認められる。祭祀に伴う埋納土器として使用している。16世紀後半。

池160出土土器（図26・図版12・13）

土師器皿S（127～130）、施釉陶器皿（131）がある。いずれも下層の腐植土層出土。土師器皿は内面底部に浅い圏線が認められる。127・128・130は内面及び口縁部に煤が付着する。陶器皿は瀬戸焼の小皿である。浅黄色の灰釉を施し、細かな貫入が認められる。17世紀前後。

土壙162出土土器（図27・図版８・９・12・13）

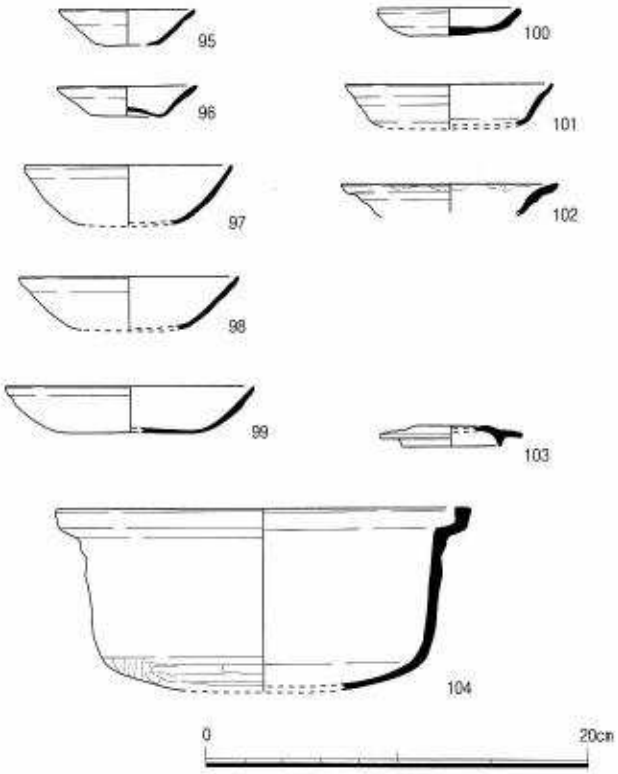


図23　土壙112出土遺物実測図（1/4）

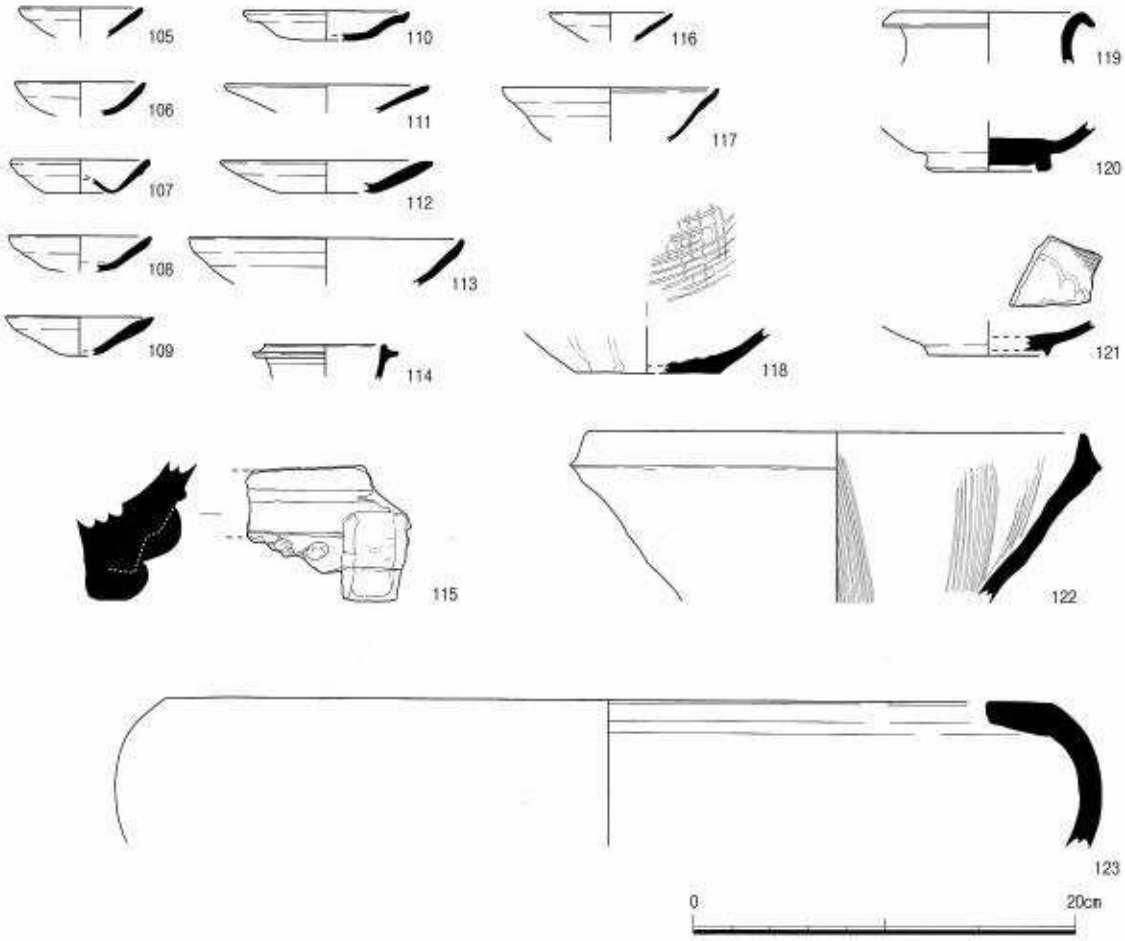


図24　井戸67出土遺物実測図（1/4）

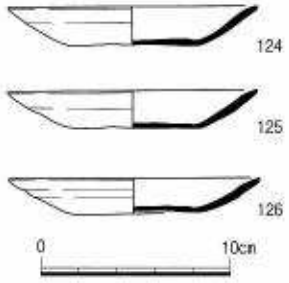


図25　土壙82出土遺物実測図（1/4）

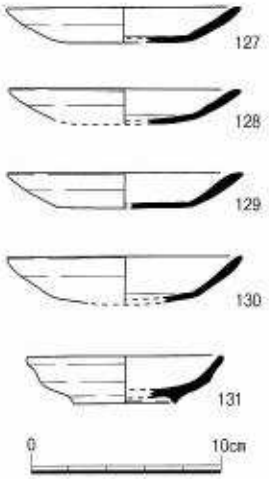


図26　池160出土遺物実測図（1/4）

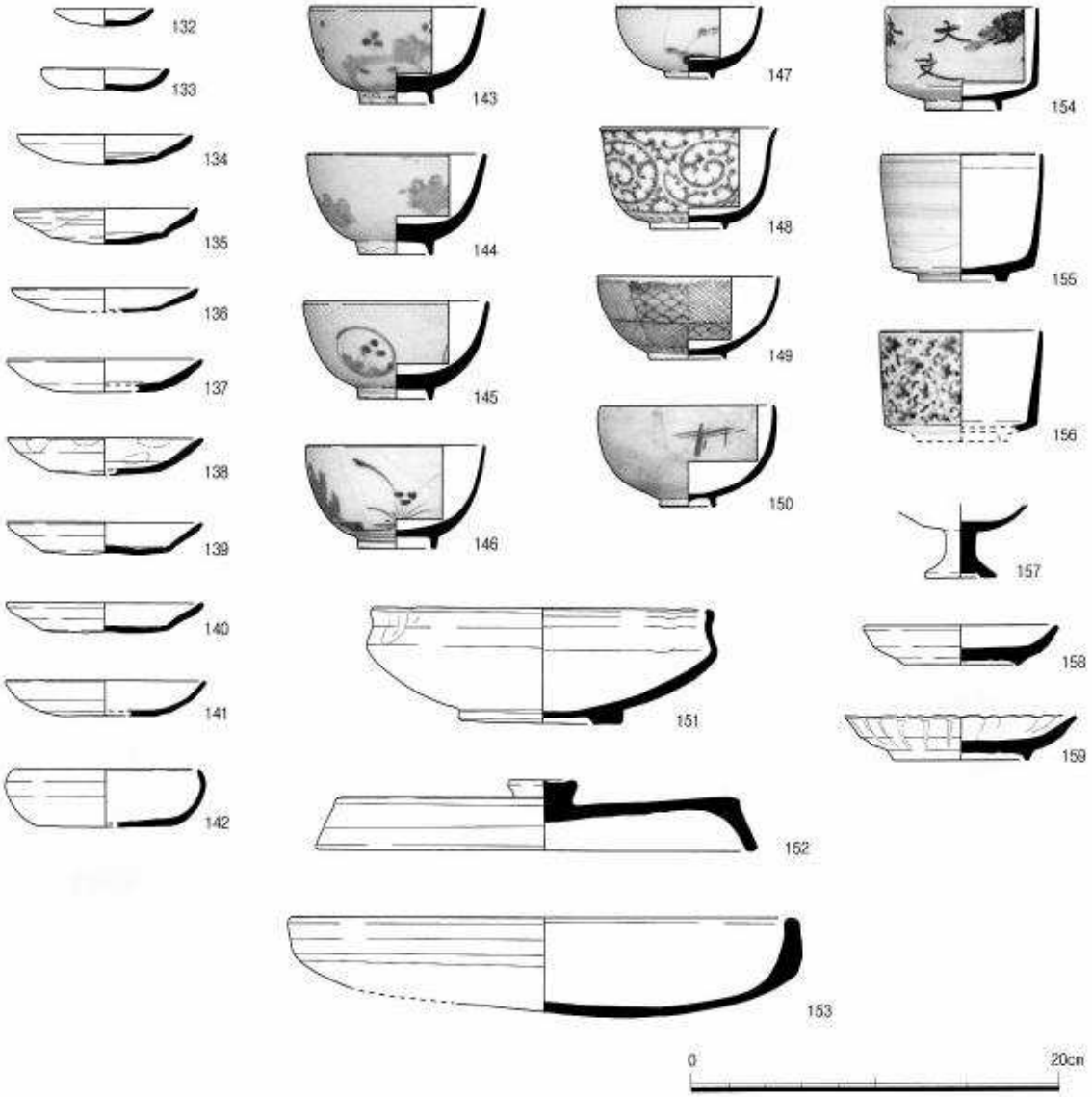


図27　土壙162出土遺物実測図（1/4）

土師器（132～140、142、152、153）、陶器（141、150、151、154、158、159）、染付（143～149、155～157）などがある。土師器には皿Nr（132、133）、皿S（134～140）、鉢（142）がある。137は朱塗りを施す。141はロクロ成形の陶器。外面ヘラ削りをおこなう。口縁端部及び内面に朱塗りを施す。鉢（142）は口径10.2cm、器高3.1cmの小鉢である。152は焙烙の蓋、扁平なつまみをもつ。153は浅めの焙烙鍋。150・151・154は京焼系の碗と鉢である。158・159は美濃瀬戸系の陶器皿である。染付はいずれも肥前系磁器、143～146はコンニャク判である。157は仏飯器。
江戸中期の18世紀前後のものである。

瓦　類

平安時代から江戸時代の軒丸瓦12点、軒平瓦13点の計25点の軒瓦が出土している。その内、井戸67から14点出土した。

井戸67出土軒瓦（160～173）（図28・図版10・11）

複弁蓮華文軒丸瓦（160）

掘形出土。蓮弁は互いに接する。外区に大きめの珠文を配する。瓦当裏面の周縁部はヘラ削り調整をおこなう。胎土は砂粒を含み、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。

蓮華文軒丸瓦（161）

石組内出土。瓦当面剥離しているが、おそらく蓮華文である。外区は一段高くなり、密に珠文を配する。瓦当裏面指押さえ痕顕著に残る。胎土は白色微砂粒を含み、橙灰色を呈する。

巴文軒丸瓦（162～165）

162～164は石組上面の埋土より出土。165は石組内出土である。162は瓦当面の笵がずれている。右巻きの巴文を配する。珠文はない。胎土は緻密、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。163は右巻きの巴文を配する。外区に珠文が巡る。瓦当裏面平滑に仕上げる。胎土は微砂粒を含み、暗灰色を呈する。164は左巻きの巴文を配する。大きめの珠文を配する。胎土に小石を含み、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。165は右巻きの三巴文を配する。外区に小粒の珠文を配する。胎土は微砂粒を含み、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。

斜格子文軒平瓦（166）

石組内出土。菱形の斜格子文を配する。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘い。半折曲げ技法である。幡枝窯産[註4]。

唐草文軒平瓦（167・170～173）

170は石組内出土、その他は石組上面の埋土出土。167は瓦当部上端を幅広くヨコ方向のヘラ削りをおこなう。胎土は白色粒を多く含み、黄灰色を呈する。半折曲げ技法である。170は顎部凸面はヨコ方向のヘラ削り、側面はタテ方向のヘラ削りをおこなう。胎土は砂粒を含み、淡灰色を呈する。171～173は瓦当上端をヨコ方向にヘラ削りする。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。

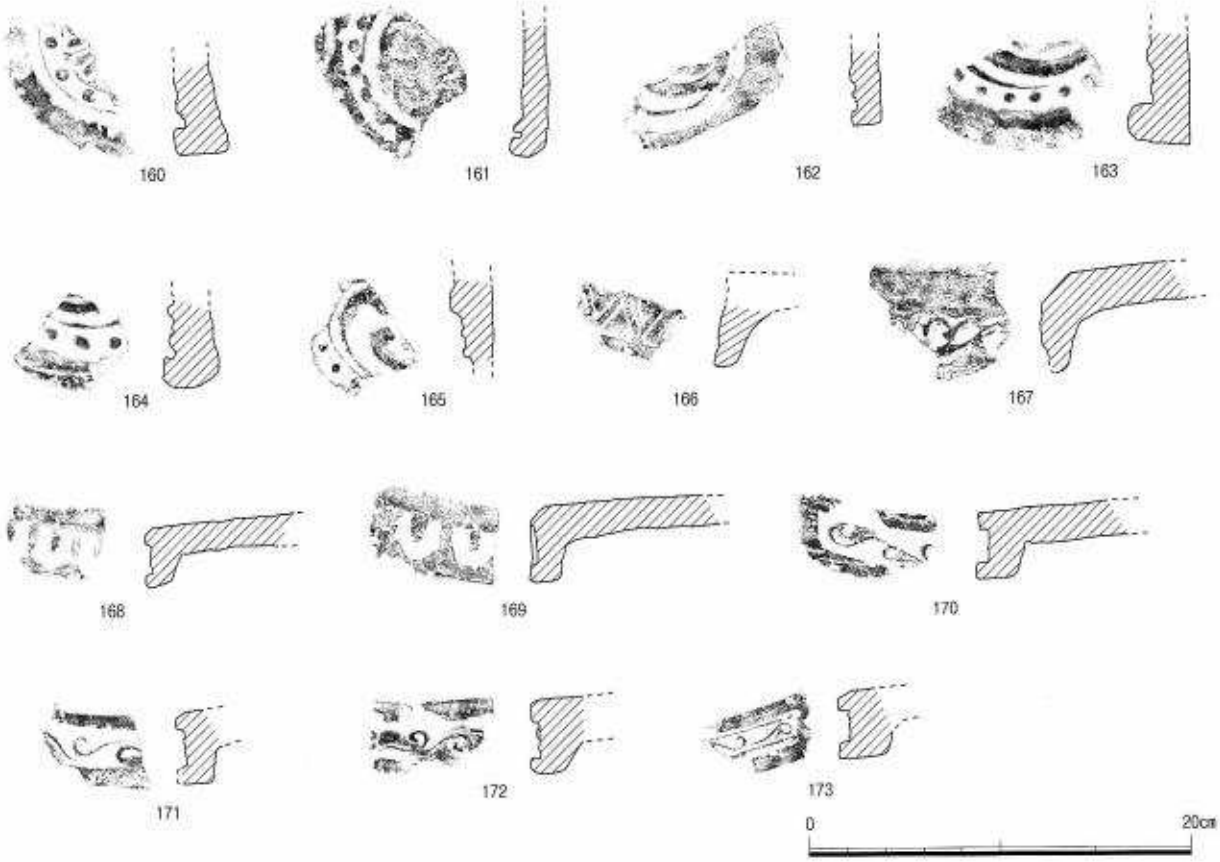


図28　井戸67出土軒瓦拓影・実測図（1/4）

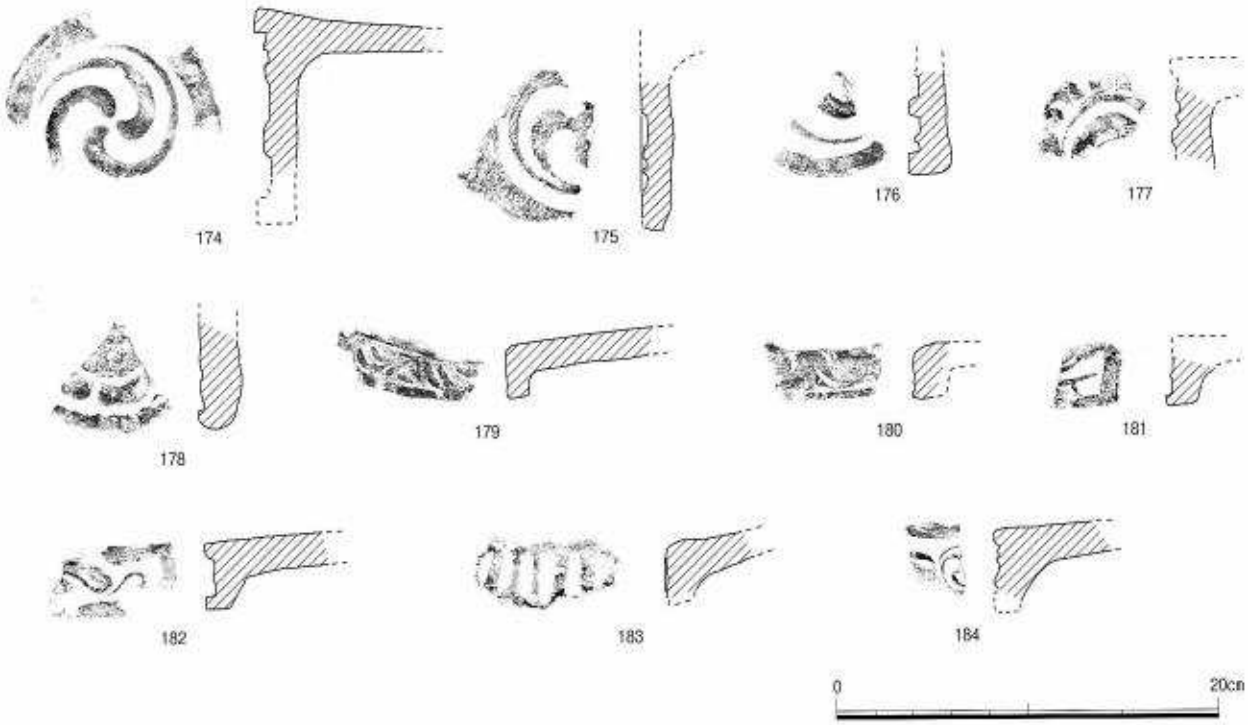


図29　軒瓦拓影・実測図（1/4）

剣頭文軒平瓦（168・169）

石組上面の埋土出土。瓦当面上端をヨコ方向にヘラ削りする。168は瓦当面に布目痕残る。胎土は精良で、黄灰色を呈する。169は砂粒を多く含み、灰色を呈する。いずれも瓦当部裏面に曲げじわが残る。折曲げ技法である。

その他の軒瓦（図29・図版11～13）

巴文軒丸瓦（174～177）

174は土壙110出土。右巻き三巴文を配する。頭部は離れ、尾部は接しない。瓦当部裏面丸瓦との粘土付け足し痕認められ、ナデて仕上げる。胎土は砂粒を含み淡灰色を呈する。外面は黒色。175は柱穴62出土。右巻き巴文を配する。頭部は接し、尾部も互いに接する。瓦当部裏面指押さえ痕顕著に残る。胎土は緻密、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。176は柱穴70出土。右巻き巴文を配する。胎土は白色砂粒を含み、暗青灰色を呈する。177は池160出土。右巻き巴文を配する。外区に珠文を配する。胎土は砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。

蓮華文軒丸瓦（178）

土壙177出土。おそらく複弁である。瓦当部裏面指押さえ痕顕著に残る。胎土は微砂粒を含み、灰色を呈する。

唐草文軒丸瓦（179～182）

179と180は同文であろう。179は整地層出土。180は土壙199出土。ともに瓦当面上端ヨコ方向のヘラ削りをおこなう。平瓦凹部の布目は細かい。胎土は砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。折り曲げ技法である。181は土壙81出土。瓦当部上端ヨコ方向のヘラ削りをおこなう。胎土は砂粒を含み、黄灰色を呈する。折り曲げ技法である。182は土壙196出土。側面はタテ方向のヘラ削り、顎部凸面はヨコ方向のヘラ削りをおこなう。平瓦部凸面は平滑に仕上げる。胎土は緻密、橙灰色を呈する。二次焼成を受けている。

剣頭文軒平瓦（183）

183は土壙162出土。瓦当上端をヨコ方向のヘラ削りをおこなう。胎土は微砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。半折り曲げ技法である。

巴文軒平瓦（184）

184は土壙200出土。三巴文と雁行文を配する。胎土は微砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。折り曲げ技法である。

石 製 品（図30・図版13）

硯（185・186）

185は井戸67の井戸底木枠内出土。石材は暗橙灰色を呈する。186は土壙162出土。隅部は輪花に縁取る。材質は頁岩である。

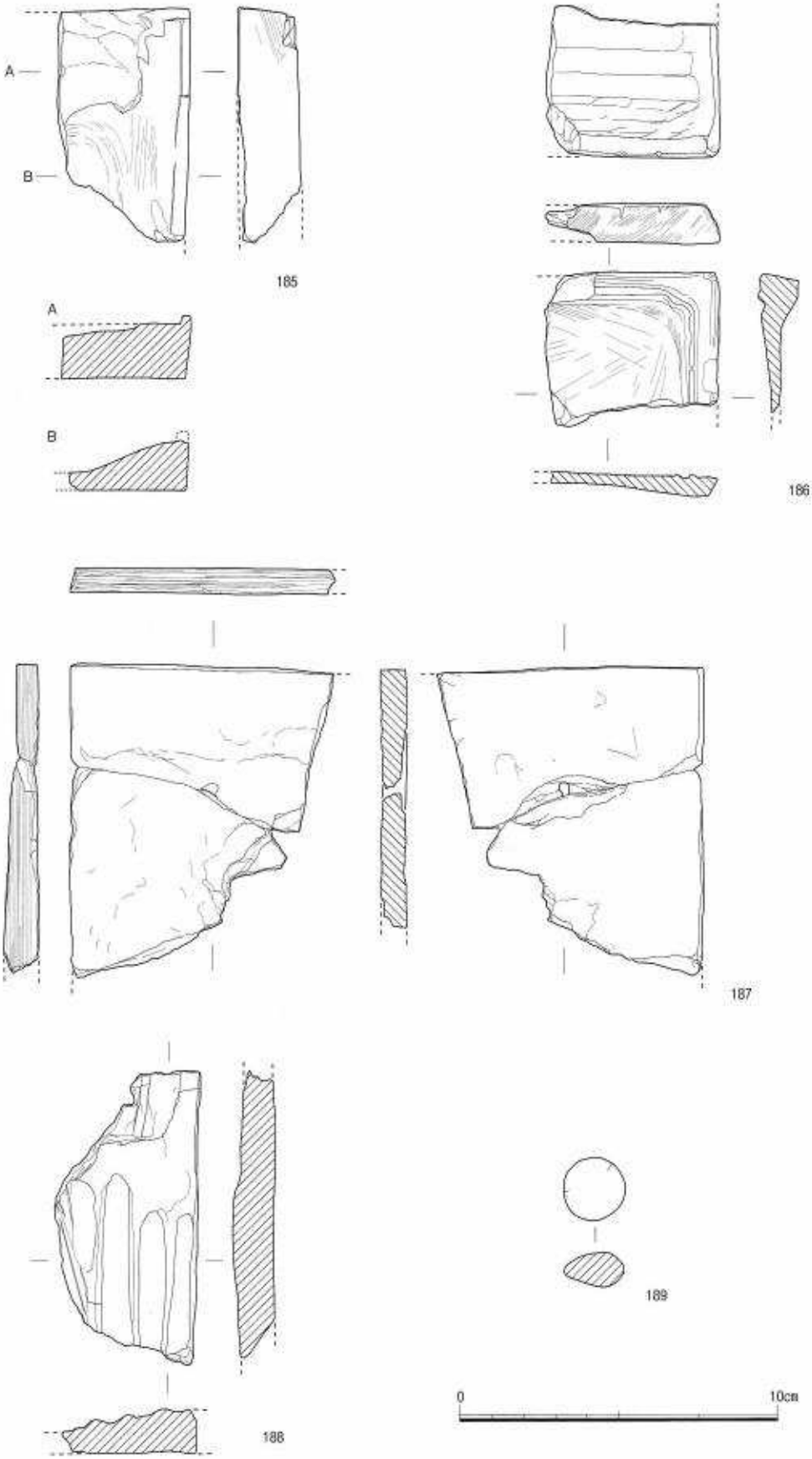


図30　石製品実測図（1/2）

用途不明石製品（187）

溝210下層より出土。方形を呈する。孔を穿った痕跡がある。表裏ともに未調整。頁岩である。

砥石（188）

土壙139より出土。幅７㎜程の溝が４条認められる。頁岩である。

碁石（189）

土壙76出土。径1.9cm、厚さ1.0cmを測る。碁石とみられる。暗緑色を呈し、材質不明。

金属製品（図31・図版13）

銭貨、キセル、釘などがある。銭貨には開元通寶（または開通元寶）３点、大観通寶１点、永楽通寶１点、熙寧元寶１点、不明１点の計７点出土している。

銭貨（190～193）

開元通寶（190・191）は621年初鋳。190は井戸67石組上層埋土、191は池160腐植土層出土。大観通寶（192）は井戸216木枠内最下層出土。北宋の1107年初鋳。永楽通寶（193）は井戸67掘形出土。明の1408年初鋳。

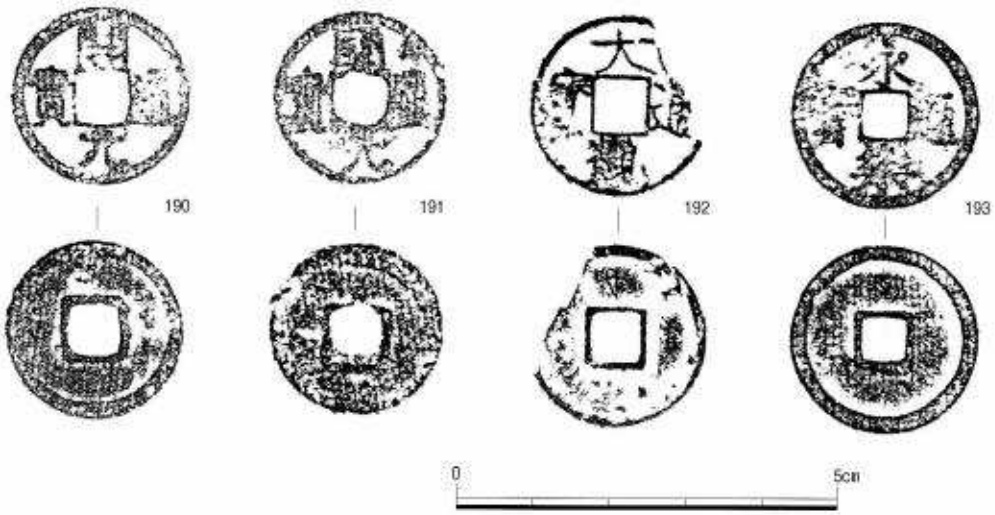


図31　銭貨拓影図（1/1）

Ⅳ まとめ

今回の調査においては、古墳時代に遡る小溝跡、平安時代中期の掘立柱建物跡、平安時代後期の溝跡、鎌倉時代の井戸跡、室町時代の井戸跡、江戸時代前期の池跡、江戸時代中期の土取跡などを検出した。

それらの内、調査区の中央部で検出した平安時代の溝210は園池に伴う遣水跡と考えられる。溝内からは11世紀後半から12世紀末にわたる土器類が多量に出土した。この溝210の両肩部には11世紀後半の土器類を含む整地層225と命名した土層があり、あるいは本来整地層225が遣水遺構の一部で11世紀後半に溝210に作り替えた可能性がある。また、溝210の南側に土器溜り状の土壙132があり、11世紀後半代の土器類が大量に出土した。文献資料によれば当地は平安時代後期には藤原国明（1064～1105）の六角東洞院第が存在したとされ、この邸宅は承徳元年（1097）に白河法皇の御所となり、後に中納言兼検非違使別当であった藤原公能（1115～1161）、九条家の祖といわれる藤原兼実（1149～1207）へと受け継がれていったとされているところである。[注6] 今回検出した土壙132、整地層225、溝210の各遺構の年代が11世紀後半から12世紀末に比定でき、藤原国明から藤原兼実に伝領されていった時代とほぼ重なり、出土土器類の最古期の年代より、藤原国明の六角東洞院第の邸宅は当初より園池を伴ったものであったことが明らかとなった。そしてこの園池に伴う遣水跡は13世紀前半には埋まっており、園池そのものもその頃には廃絶したものと考えられる。

ところで、整地層225を除去したベース面において掘立柱229（建物１）を検出した。この柱穴は一辺１ｍの方形を呈し、平安時代中期以前の特徴を有する。掘形内よりは土師器細片が出土したのみで、明確な時期を特定することは困難であったが、少なくとも文献資料で遡れる藤原国明以前の建物の柱跡である。掘立柱229の１間北側には柱穴208があり、掘形の形状及び埋土などから同じ建物の柱跡とみられ、その柱間3.6m（１丈２尺）を測る。柱間の大きさから大規模な建物跡が想定され、文献資料の記録に残らない高級貴族などの邸宅跡が存在したことがうかがえる。なお、土壙180、土壙113は建物１の軸線上に位置し、また土壙180の南１ｍのところに方形状の凹みがあり、これも建物１の軸線上に位置することから、一体のものかと検討したが、土壙113は中世の土師器皿が出土しており、方形状の凹みは機械力による最初の土砂除去時に埋土が失われており、ベース面が凹んだ状況のみであった。土壙180（図13）は掘形内に0.2～0.3mの川原石が数個体含まれ、礎石建ちに伴う柱穴状を呈するが、出土遺物が土師器細片で時期は不明である。土壙180から土壙113までを仮に同一の建物として想定すると、各心心間は2.1m、3.2m、3.2m、3.2mを測り、整合性をもつ。その場合、土壙180は北庇に当たる柱跡で礎石建ちとなる。

鎌倉時代の方形縦板組井戸216は井戸枠本体に比較して掘形が異常に大きいのが特徴である。井戸内の出土遺物からは13世紀前半頃のものと考えられる。藤原兼実時代以降の井戸である。

室町時代後期の石組井戸67は掘形内より永楽通寶（初鋳1408年）が出土しており、井戸が作ら

れた上限を示す。石組内及び石組上面埋土、掘形の出土遺物より、井戸が作られた時期は15世紀後半頃と考えられる。

江戸時代前期の池160は人工池である。池底には植物遺体を含む腐植土層が厚く堆積しており周辺に木立の存在が想定され、庭園に付随する池跡の可能性が高い。江戸時代においては六角堂の南側は宿屋集中地[註7]として知られており、その関係性が想定できる。

調査区の北部には江戸時代中期の大規模な土壙162がある。掘形は袋状を呈し、下層の砂礫層現出面で掘形は終わっており、底部は平坦である。また池160と接する壁面で掘形が止まっていることなどから、土取穴と考えられる。掘形内より18世紀頃の陶磁器類が多量に出土した。

以上、今回は調査面積が狭く、なおかつ遺跡の検出面が地表下２ｍと深く実際の調査面積はさらに狭小であったが、平安時代から江戸時代にかけて貴重な新たな知見を得ることができた。とくに藤原国明から藤原兼実に伝領されていく過程で、園池の存在が確認できたことは大きな成果であった。また、文献資料の記録に無い大規模な建物跡の存在が明らかとなり、今後の周辺調査に期待を抱かせるものとなった。

註１　『角川日本地名大辞典　26京都府』角川書店　1991年。
　　『日本歴史地名体系27　京都市の地名』平凡社　1979年。
　　『平安京提要』角川書店　1994年。
註２　『平安京六角堂の発掘調査』平安京跡研究調査報告第二輯、（財）古代学協会　1977年。
註３　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。
註４　『木村捷三郎収集古瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。
註５　東野治之「開元通寶の銭文－高昌・日本の銭貨との関連から－」『考古学研究紀要２』辰馬考古資料館　1991年。
註６　註１と同じ。
註７　『史料京都の歴史９　中京区』平凡社　1985年。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうさんぼうじゅうごちょう・からすまおいけいせき
書　名	平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡
副書名	
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	家崎孝治
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	2013年3月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平安京（へいあんきょう） 左京四条（さきょうしじょう） 三坊（さんぼう） 十五町（じゅうごちょう）・ 烏丸御池遺跡（からすまおいけいせき）	京都市（きょうとし） 中京区（なかぎょうく） 六角通（ろっかくどおり） 烏丸東入る（からすまひがしいる） 堂之前町（どうのまえちょう）	26100	1 464	35度 00分 25秒	135度 45分 37秒	2012.08.27 ～ 2012.10.24	238㎡	マンション建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 弥生～古墳時代	土壙、掘立柱建物、溝、井戸	土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、石製品、瓦類、銭貨	平安時代の遺水跡

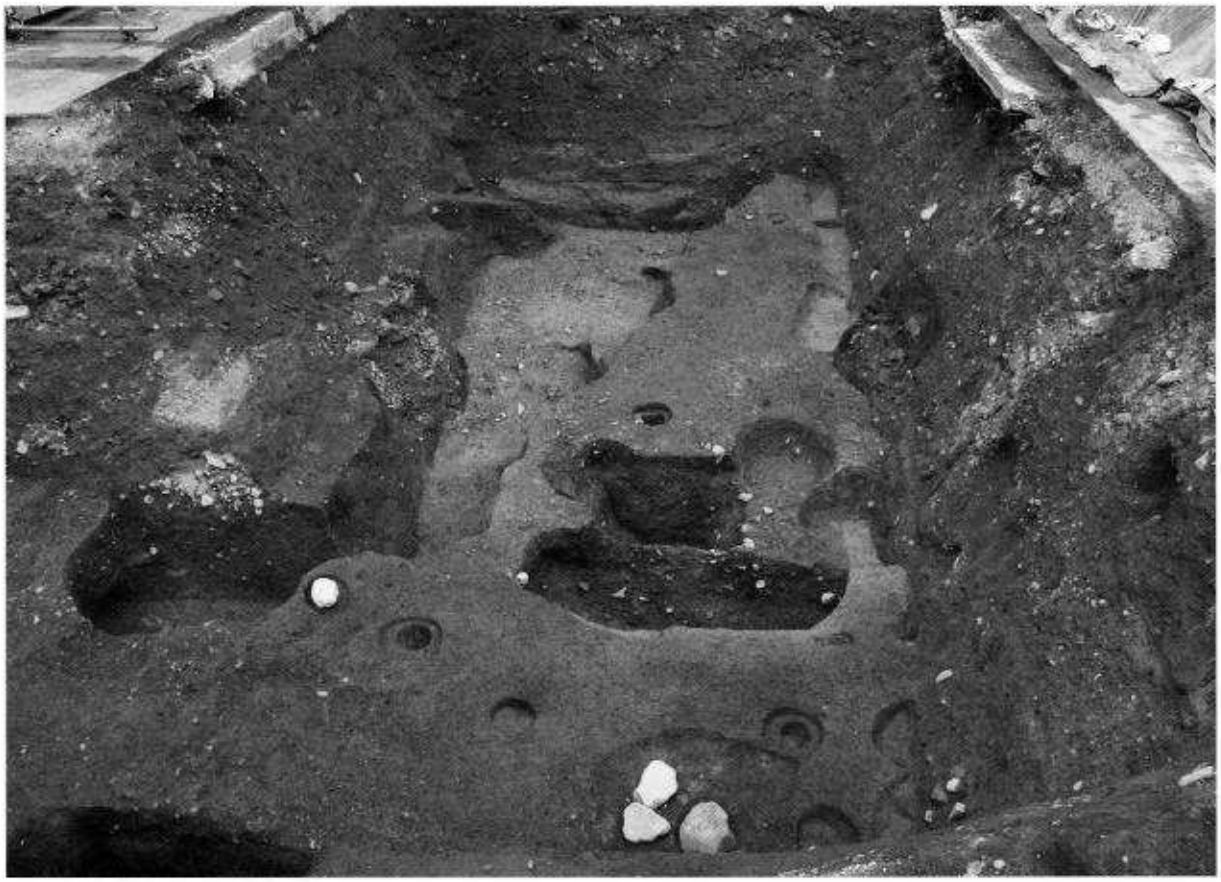
	Aランク点数（箱数）	内　訳	Bランク（箱数）	Cランク（箱数）	出土箱数合計
点数及び箱数	192点（6箱）	土師器117点、灰釉陶器5点、白磁3点、青磁6点、施釉陶器8点、焼き締陶器1点、瓦器5点、軒瓦25点、石製品4点、銭貨4点	49箱	0	55箱

図　　版

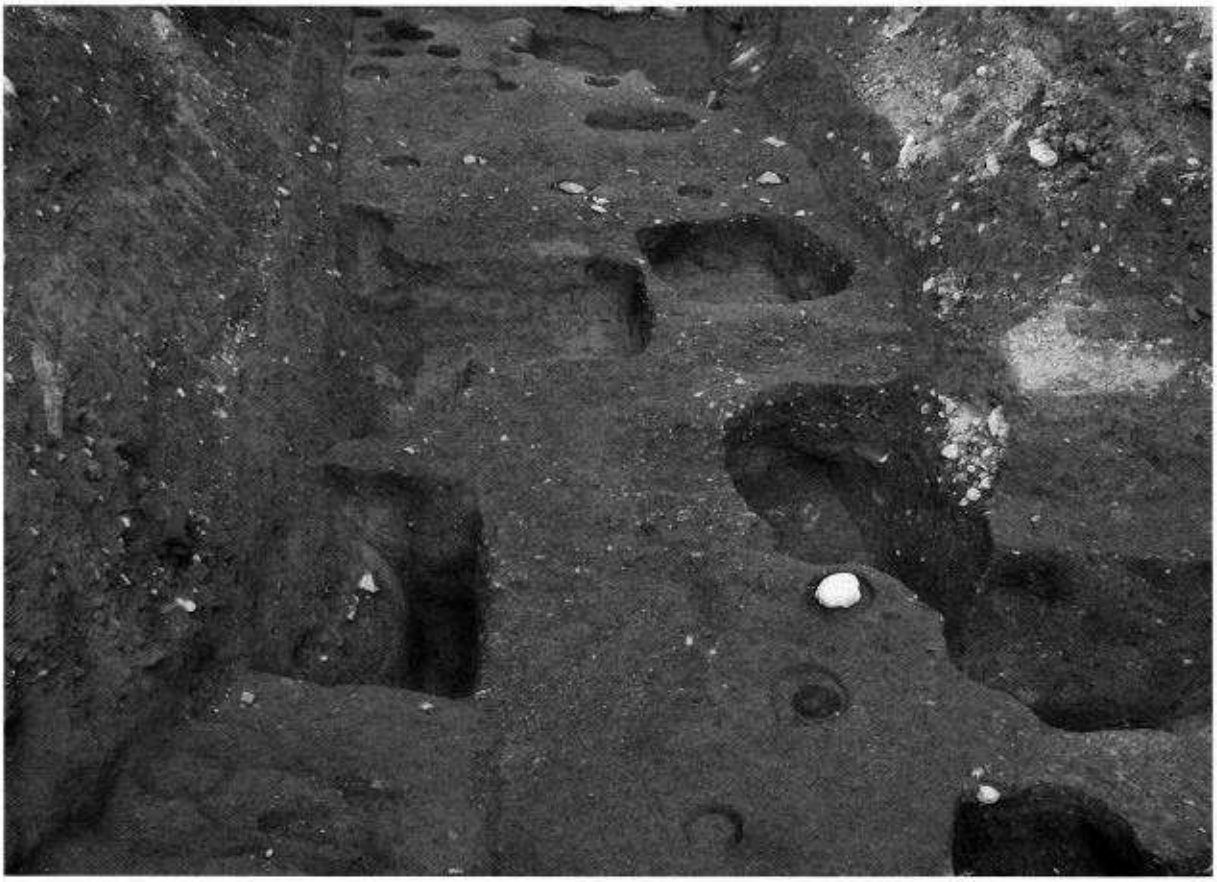
1　南半部第1面全景（南から）

2　南半部第2面全景（南から）

1　南半部第３面全景（南から）



2　北半北部第１面全景（東から）

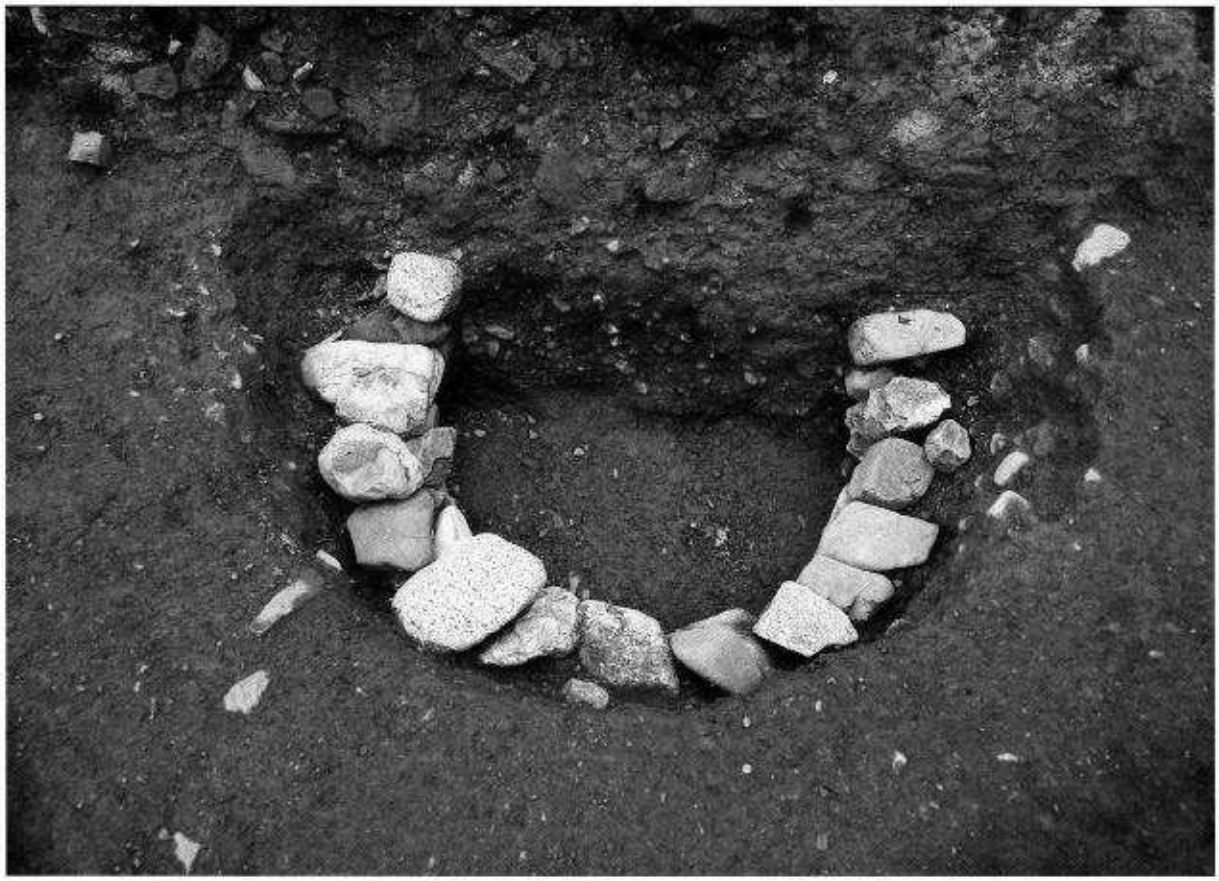


1　北半南部第１面全景（北から）

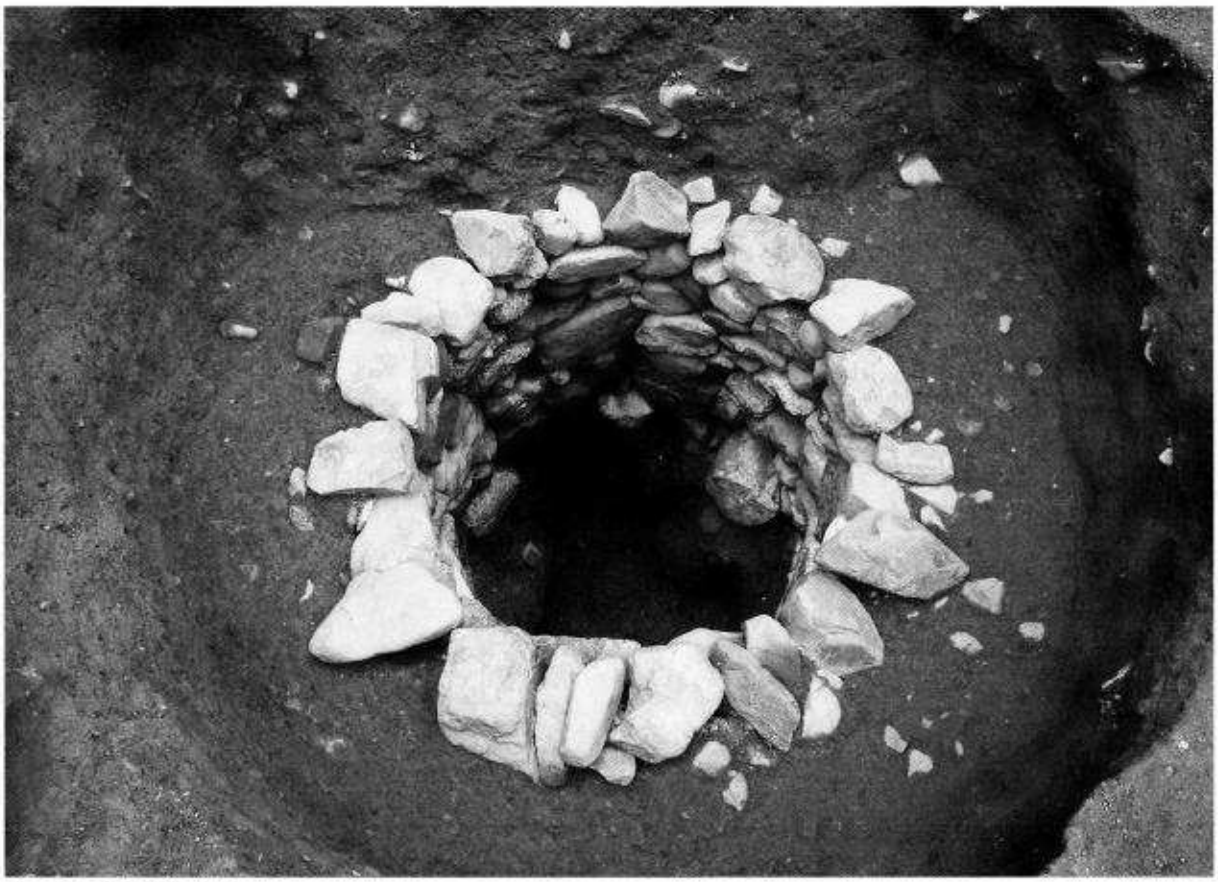
2　北半北部第２面全景（東から）

1　北半南部第２面全景（北東から）

2　北半南部第３面全景（北東から）



1　井戸20（西から）



2　井戸67（東から）

1　井戸216（北から）

2　溝210土器出土状況（北から）

2

45

8

46

17

60

18

75

19

83

20

87

24

37

整地層225（2・8）・土壙132（17～20・24・37）・溝210（45・46・60・75・83）・井戸216（87）出土遺物

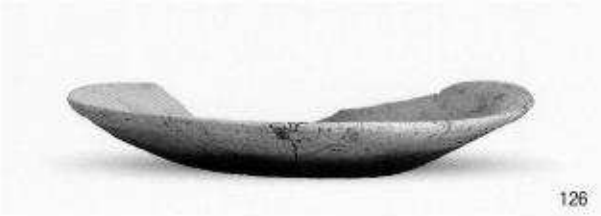
96

124

100

125

103


126

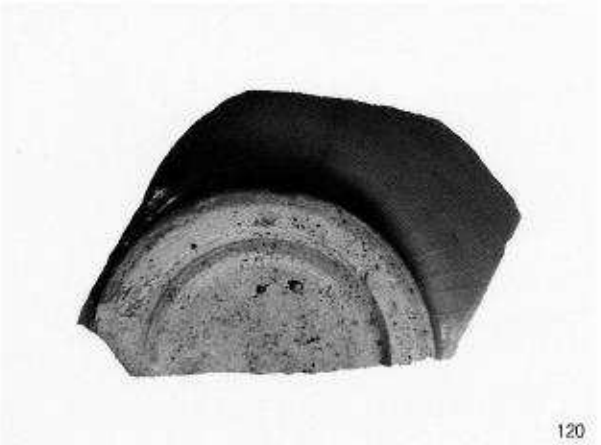
128

133

118

138

115


120

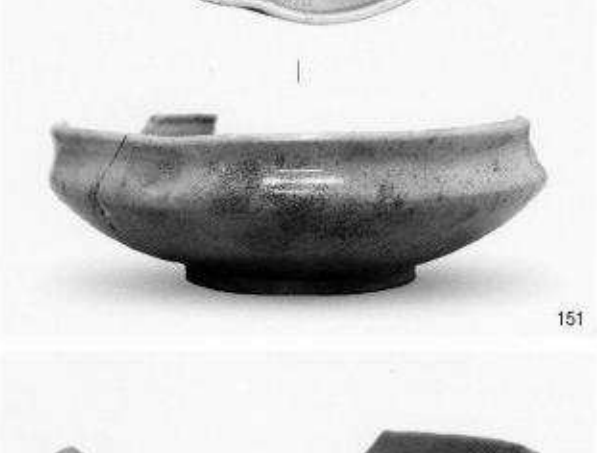
土壙112（96・100・103）・井戸67（115・118・120）・土壙82（124～126）・池160（128）・
土壙162（133・138）出土遺物

143

150

144

145


151

148

158

159

土壙162（143～145・148・150・151・158・159）出土遺物

160

164

161

165

162

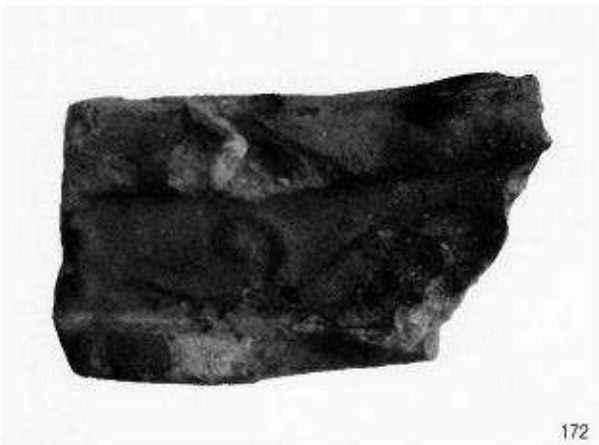
166

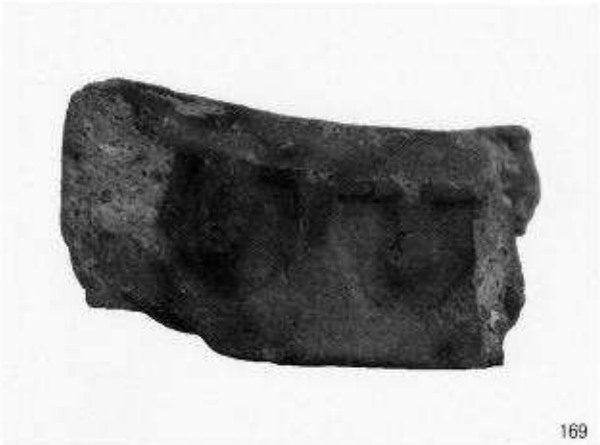
163

167

井戸67（160～167）出土遺物

168


172


169

173

170

174

171

175

井戸67（168～173）・土壙110（174）・柱穴62（175）出土遺物

176

180

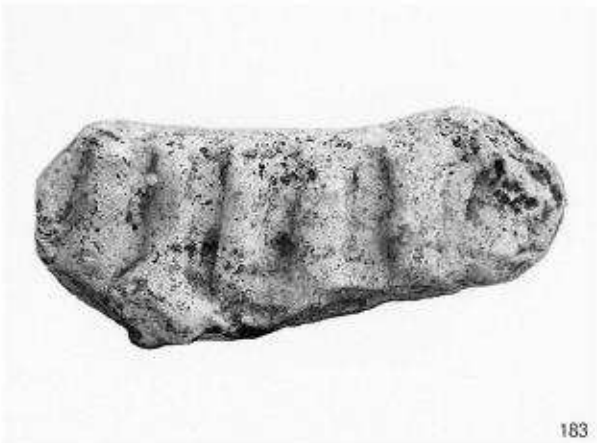
177

181

178

182

179


183

柱穴70（176）・池160（177）・土壙177（178）・整地層（179）・土壙199（180）・土壙81（181）・土壙196（182）・土壙162（183）出土遺物

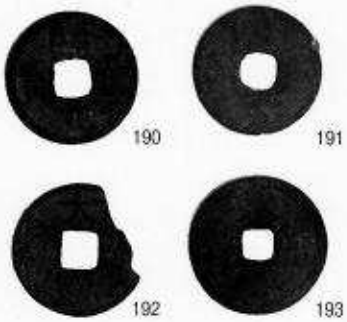
184

188

185

189

186


190 191 192 193

187

土壙200（184）・井戸67（185・190・193）・土壙162（186）・溝210（187）・土壙139（188）・土壙76（189）・池160（191）・井戸216（192）出土遺物

平安京左京四条三坊十五町・烏丸御池遺跡

発行日　2013年3月31日
編集
発行　古代文化調査会
住所　〒658-0032　神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL　(078)857-6368
印刷　真陽社
〒600-8475　京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL　(075)351-6034